

洞ノ上遺跡群 I

大分県中津市大字伊藤田所在遺跡の調査
中津市文化財調査報告第6集

1988

中津市教育委員会

はじめに

大分県の北部、山国川を狭んで福岡県築上郡と対峙する中津市は、県北の政治、経済、文化の中心として発展してまいりました。また、反面豊かな自然と文化遺産の宝庫としても知られ、原始、古代はもとより、近世奥平10万石の城下町として今なお古き良き伝統を残す町と言えます。

さて、こうした素晴らしい生活環境を持つ中津市でも、近年は様々な開発の波が押し寄せて来ており、文化遺産、特に埋蔵文化財については日々破壊の危機に直面しております。

本書はこうした開発の中で、圃場整備事業（農業基盤整備）に伴い緊急発掘調査がなされた才木遺跡の発掘調査報告書であります。本書が関係各位の研究の一助となれば幸甚に存じます。

最後に、調査に際し御指導、御助言をいただきました大分県教育庁管理部文化課の方々、及び、現場作業員として参加いただいた地元の方々に対し、衷心より感謝の意を表わします。

教育長 古野代代

例言

1. 本書は昭和59年度に実施した洞ノ上地区団体営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は中津市教育委員会が主体となり昭和59年4月1日～10月3日まで行ない、費用は昭和50年10月20日付庁保記第211号I-5項の規定により農林水産課と教育委員会が分担した。
3. 本書の編集及び執筆は栗焼が行ない、資料整理については我毛温子、岩崎弘子（中津市文化財資料室）の協力を得た。
4. 調査員の構成は次の通りである。

調査主体 中津市教育委員会

調査事務 阿知波豊明（中津市教育委員会市民文化センター館長）

小野 守影（同 文化係長）

調査員 田中布由彦（同 文化係主事）

栗焼 憲児（同 文化係臨時職員）

目 次

第1章	地 理 と 歴 史 的 環 境	1
第2章	調 査 の 概 要	5
第3章	遺 構 と 遺 物	9
第4章	ま と め	12

挿 図 目 次

図 1	中津市内遺跡分布図	3
図 2	角形原地区土層図	6
図 3	金迫地区土層図	8
図 4	小才木地区土層図	8
図 5	才木遺跡溝実測図及び出土土器	9
図 6	才木遺跡出土土器実測図(1)	13
図 7	才木遺跡出土土器実測図(2)	14
図 8	才木遺跡出土土器実測図(3)	15
図 9	才木遺跡出土土器実測図(4)	16
図 10	金迫地区出土土器実測図	16
図 11	才木遺跡出土土器実測図(5)	17
図 12	才木遺跡出土土器実測図(6)	18
図 13	才木遺跡溝内出土土器実測図(1)	19
図 14	才木遺跡溝内出土土器実測図(2)	20
図 15	才木遺跡溝内出土土器実測図(3)	21
図 16	才木地区出土土器実測図(1)	28
図 17	才木地区出土土器実測図(2)	29
図 18	金迫地区出土土器実測図	30

表 目 次

表 1	中津市内周知遺跡地名表	4
表 2	出土土器観察表(1)	22
表 3	出土土器観察表(2)	23
表 4	出土土器観察表(3)	24
表 5	出土土器観察表(4)	25
表 6	出土土器観察表(5)	26
表 7	出土土器観察表(6)	27
表 8	出土石器観察表(1)	29
表 9	出土石器観察表(2)	30
表 10	出土石器観察表(3)	31

図 版 目 次

図版 1	調査状況	33
図版 2	調査状況	34
図版 3	才木地区調査状況(1)	35
図版 4	才木地区調査状況(2)	36
図版 5	土器 (1)	37
図版 6	土器 (2)	38
図版 7	土器 (3)	39
図版 8	土器 (4) 石器	40

第1章 地理と歴史的環境

大分県の北端、山国川を狭み福岡県築上郡と対峙する中津市は江戸時代、細川氏、小笠原氏、奥平氏と続いた城下町として発達し、現在も大分県北部の政治、経済、文化の中心となっている。中津市の地理は広大な沖代平野と、八面山（標高659m）から延びる舌状台地を中心とした下毛原台地により代表され、現在までに多くの遺跡が確認されている。特に、近年は北大バイパス道路中津ルートの建設や、各種開発によりさらに多くの遺跡が調査された。以下その概要について述べる。

世界史的に見て人類が地球上にその足跡を残すのは260万年前と考えられている。しかし、日本では近年の調査によりようやく20万年前までの遺跡が確認されたにすぎない。中津市内でこうした旧石器時代の遺跡が確認されたのは上ノ原遺跡^{(注)1}と才木遺跡のみで、それも極めて断片的なものと言わざるえない。しかし、隣接する宇佐市では比較的まとまった資料が発見されており、今後本市でも注意してゆく必要がある。

縄文時代の遺跡については、後期から晩期にかけて4ヶ所が確認されている。その他時期不明のものが2ヶ所あるが、代表的なものとして棒垣遺跡^{(注)3}、植野貝塚^{(注)4}、高畑遺跡^{(注)5}を上げることができる。棒垣遺跡は従来入垣貝塚と分けて論じられてきたが、遺跡の性格上一体のものであるとして考えるべきであり、県下では数少ない貝塚と住居址により構成された貴重な遺跡と言える。植野貝塚は昭和30年に確認調査がなされており、良好な貝層が確認されている。また、高畑遺跡は昭和24年に土偶が発見され注目されたが、詳細は不明である。これらはいずれも後期のもので、全て台地上に位置している。

弥生時代の遺跡は上万田遺跡^{(注)7}、高瀬遺跡^{(注)8}、八丁遺跡^{(注)9}、城山窯跡群O地区^{(注)10}などが知られる。いずれも中期中葉から後期にかけてのものであるが、大まかに中期については北部九州の影響が強い傾向があり、後期には在来系の特徴が強い。しかし、良好な状態での出土例は少なく不明な点が多い。

古墳時代には多くの遺跡が確認されている。まず集落関係では大坪遺跡^{(注)11}、草場遺跡^{(注)12}、上万田遺跡^{(注)13}、種多田遺跡^{(注)14}などがある。前期の上万田遺跡以外は後期のものである。墓制に関するものでは上ノ原横穴^{(注)15}、岩井崎横穴^{(注)16}、城山横穴^{(注)17}、幣篋邸古墳^{(注)18}などがある。特に上ノ原横穴では5世紀後半から6世紀後半にかけて都合3期にわたる造墓が行なわれ、遺存状態の良さも相俟って細かな葬送儀礼や、人骨による家族構成の解明など、多大な成果を上げつつある。この他、市内で唯一の前方後円墳として亀塚古墳^{(注)19}が上げられるが、残念ながら昭和30年頃国道建設に伴ない何ら調査もなされないまま破壊されている。次に生産関係の遺跡として、伊藤田地区に点在する窯跡群がある。これらは近年急速に調査がなされており、城山窯跡群をはじめ瓦ヶ迫窯跡^{(注)20}、草場窯跡^{(注)21}、夜鳴池西地区^{(注)22}、踊ヶ迫窯跡^{(注)23}などがある。特に踊ヶ迫窯跡は瓦陶兼業窯として注目を集め、初期仏教文化成立の問題と合せ議論が続いている。

これ以降、中津地方では7世紀後半に成立したとされる相原廃寺^{(注)25}や、緑袖陶器を伴出した野依遺跡^{(注)26}（12世紀後半～13世紀初頭）などがある。特に相原廃寺についてはほとんどの遺構が存在しないことから、現在わずかに残される金堂基壇の一部を中心に早急な保護対策を検討してゆかなければならない。

以上述べてきたように、中津地方の埋蔵文化財についてはまだまだ不明な点が多い。しかし、今回報告する才木遺跡をはじめ新発見の資料も蓄積されつつあり、さらに調査を進めてゆきたい。

- 注 1 小倉正五（1983）「大分県の旧石器時代遺跡二、周防灘沿岸」（大分県史 先史篇Ⅰ）
- 注 2 注 1 に同じ
- 注 3 宮内克己（1983）「大分県の縄文時代遺跡一、周防灘沿岸地域」（大分県史 先史篇Ⅱ）
- 注 4 小倉正五他（1979）「石原貝塚、西和田貝塚」宇佐市教育委員会
- 注 5 注 4 に同じ
- 注 6 注 4 に同じ
- 注 7 中津南高校郷土部（1972）「上万田遺跡発掘調査報告書」中津市教育委員会
- 注 8 中津南高校にて資料保管
- 注 9 「三保の文化財を守る会」にて資料保管
- 注 10 栗焼憲児（1985）「伊藤田城山窯跡群」中津市教育委員会
- 注 11 1984年県文化課調査
- 注 12 1982年県文化課調査
- 注 13 注 7 に同じ
- 注 14 渋谷忠章他（1981）「加来地区遺跡群」大分県教育委員会
- 注 15 村上久和他（1982～85）「上ノ原遺跡群Ⅰ～Ⅳ」大分県教育委員会
- 注 16 中津市教育委員会編（1986）「なかつの文化財」
- 注 17 注 16 に同じ
- 注 18 村上久和（1986）「幣籠邸古墳」中津市教育委員会
- 注 19 賀川光夫他（1977）「古墳時代の中津地方」（中津の歴史）中津市
- 注 20 注 10 に同じ
- 注 21 小林昭彦他（1984）「上ノ原遺跡Ⅲ、伊藤田窯跡群Ⅱ」大分県教育委員会
- 注 22 小林昭彦他（1985）「伊藤田窯跡群Ⅲ」大分県教育委員会
- 注 23 注 22 に同じ
- 注 24 賀川光夫（1965）「古代史—初期仏教文化」（中津市史）中津市
- 注 25 賀川光夫（1955）「豊前中津市相原廃寺調査報告」中津市教育委員会
- 注 26 賀川光夫他（1977）「飛鳥の瓦と白鳳寺院」（中津の歴史）中津市

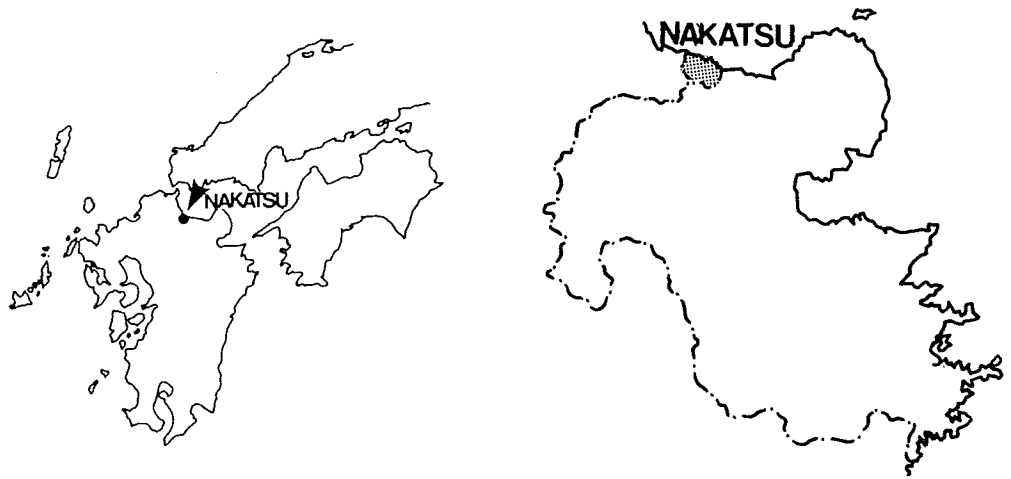


図1 中津市内遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	所在地	No.	遺跡名	種別	所在地
1	鍋島古墳	古墳	今津	40	下池永遺跡	散布地	池永
2	鍋島遺跡	散布地	"	41	全徳遺跡	散布地	合馬
3	若簾古墳	古墳	今津	42	相原廃寺	寺院	相原
4	植野貝塚	貝塚	植野	43	三口遺跡	包含地	上ノ原
5	植野伽藍遺跡	散布地	"	44	上万田遺跡	包含地	万田
6	植野古城遺跡	散布地	"	45	高瀬遺跡	包含地	高瀬
7	野依古墳	古墳	野依	46	高畑遺跡	包含地	"
8	松尾遺跡	散布地	"	47	豊田小学校遺跡	包含地	豊田町
9	是則塚	古墳	"	48	龜山古墳(消滅)	古墳	合馬
10	黒川古墳	古墳	伊藤田	49	沖代条里遺構	条里	沖代町
11	大池窯跡	窯跡	野依	50	野依条里遺構	条里	野依
12	瓦ヶ迫窯跡	窯跡	"	51	大悟法条里遺構	条里	大悟法
13	野依迫ノ谷遺跡	散布地	"	52	大池窯跡	窯跡	野依
14	踊ヶ迫窯跡群	窯跡	"	53	草場遺跡	散布地	伊藤田
15	穂谷窯跡群	窯跡	"	54	草場窯跡	窯跡	伊藤田
16	野依烽火台	烽火台	"	55	城山窯跡群	窯跡	伊藤田
17	ゴンゲ遺跡	散布地	"	56	大谷窯跡群	窯跡	伊藤田
18	大谷窯跡群	窯跡	"	57	才木遺跡	散布地	"
19	城山横穴群	横穴	伊藤田	58	洞ノ上窯跡	窯跡	"
20	城山古墳群	古墳	"	59	入垣貝塚	貝塚	福島
21	洞ノ上横穴群	横穴	伊藤田	60	棒垣遺跡	包含地	"
22	城土遺跡	散布地	伊藤田	61	福島地下式横穴	横穴	"
23	福島遺跡	包含地	福島	62	北原第3遺跡	散布地	北原
24	三保遺跡	包含地	"	63	大悟法遺跡	散布地	大悟法
25	田丸遺跡	城跡	"	64	中原遺跡	散布地	中原
26	長久寺貝塚	貝塚	"	65	上池永遺跡	散布地	池永
27	北原遺跡	散布地	北原	66	西永添遺跡	散布地	永添
28	北原第2遺跡	散布地	"	67	勘助野地遺跡	墳墓	上ノ原
29	土木貝塚	貝塚	"	68	上ノ原横穴群	横穴	"
30	定留貝塚	貝塚	定留	69	沖代小学校遺跡	水田跡?	沖代町
31	黒水遺跡	散布地	加来	70	合馬遺跡	散布地	合馬
32	上ノ原遺跡	包含地	上ノ原	71	ガラヌノ遺跡	古墳・墓跡	合馬
33	幣旗邸古墳	古墳	"	72	舞手橋東段上遺跡	住居跡?	田尻
34	相原古墳1、2号	古墳	"	73	是能遺跡	散布地	定留
35	坂手隈横穴群	横穴	"	74	和間貝塚	貝塚	定留
36	坂手前横穴	横穴	"	75	諸田遺跡	散布地	今津
37	台遺跡	散布地	"	76	中津城	城跡	二ノ丁
38	永添中園遺跡	包含地	永添	77	停車場遺跡	散布地	今津
39	梶屋遺跡	散布地	"	78	植野遺跡	散布地	植野

表1 中津市内遺跡地名表

第 2 章 調 査 の 概 要

調査は昭和59年6月4日～7月8日までと同年8月5日～10月19日までの二次に分けて行なった。調査の方法は地形によって任意に10m×10mのメッシュを設定し、各コーナーに2m×2mのグリッドを設けて行なった。但し、場所によっては水放けの悪いものや、作付けの都合、また事業に加わらない場所などが散在するため、それらの間を縫う形での調査を強いられた。さらに事業対象面積が8.9ヘクタールに及ぶことから、対象地域を角井原、才木、小才木、金迫の4地区に分けて調査を実施した。

調査地区の地形はほぼ東側と西側を八面山から延びる舌状台地によって狭まれた谷地形を呈し、西側にはさらに2条の小谷を形成している。また、西から東に向けては緩やかに傾斜し、比高差は約7m程度である。この西側の小谷を各々小才木地区、金迫地区とし、調査区中央部を才木地区、東側の最も低い地区を角井原地区とした。

1 角井原地区

標高19m前後で、調査区の中では最も低い地区であるが東側舌状台地の斜面に昭和58年に調査が行なわれた「伊藤田城山窯跡群」が存在し、さらにその灰原の一部が水田面にまで達することが確認されているため、台地の裾を中心にグリッドを設定し調査を行なった。

その結果、遺物は若干出土するものの、灰原を想定する程の結果は得られなかった。また、住居跡等、他の遺構についても認めることはできなかった。

2 才木地区

才木地区は地形の特徴から最も遺構が存在する可能性が高い地区と考えられた。特に、通称一本松と呼ばれる地点は古来お稲荷様を祀ったと言われ、マウンド状に盛土がされていることから、古墳の可能性があると考えられた。また山裾の部分では石器等が表採されていたため同様に遺構の存在が予想された。

まず、通称一本松では縦方向に5トレ、横方向に6・7トレ、さらに裾部分に4トレを設けて調査を行なったが、土層の上では人工のものとは判断される結果は得られなかった。また、主体部の存在もなく、遺物等が全く出土しないことなど、古墳としての可能性は認められなかった。ところが一本松南側の水田面からは一部多量の須恵器、土師器が出土し、さらに溝状遺構が認められたため、これらを中心に本調査の必要性があると判断された。

次に山裾の部分では、農道を狭んで約2m程標高が高いため特に注意された。しかし、結果的には耕作土等からは遺物が出土するものの遺構は認められなかった。これは、土層観察を行なった結果、もともと裾から東側へなだらかな傾斜の地形であったものを削平して平坦にしたため、遺構がすでに破壊されていたと考えられた。

したがって、一本松南側についてのみ本調査を実施することとした。

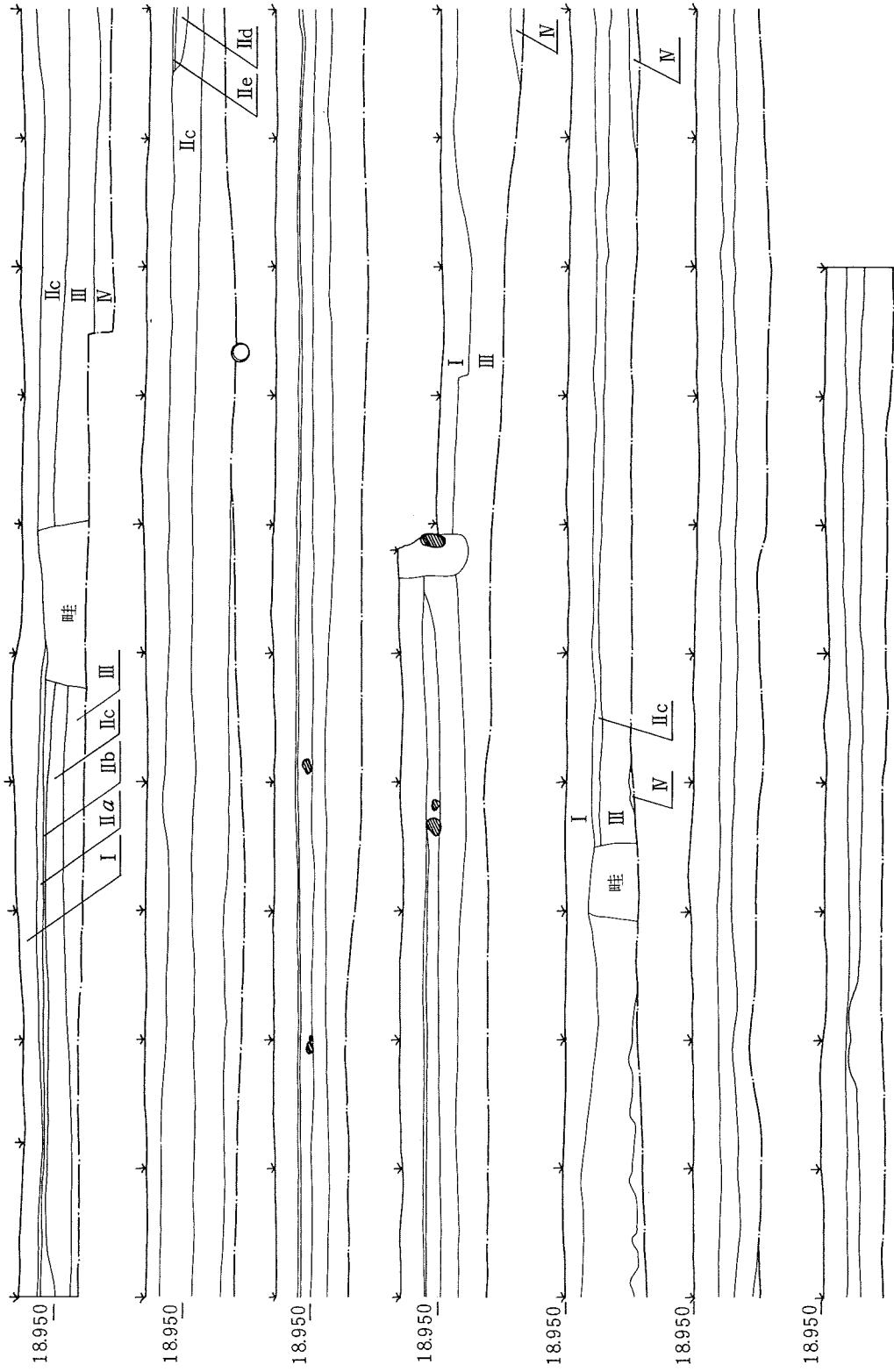


图2 角井原地区 土层图

3 小才木地区

小才木地区は西側に向けて小谷が形成されており、山腹に窯跡が残されている可能性が考えられた。このため、最も可能性が高いと考えられた南側の山裾部分に9トレを設定し確認を行なった。しかし、灰原などは確認できず若干の須恵器が出土したにすぎず、将来的に山腹などで窯跡等が発見される可能性は残しつつも、今回の調査では明確にしえなかった。また、水田部分についても同様であり、遺構等は検出されなかった。

4 金迫地区

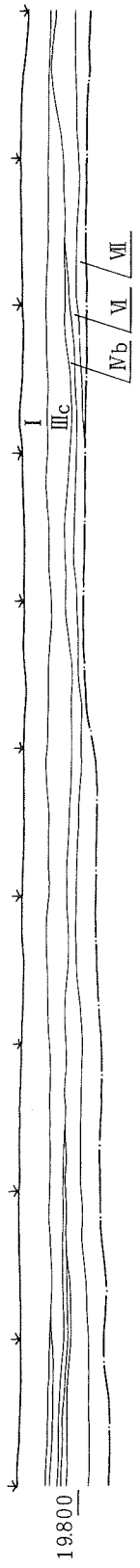
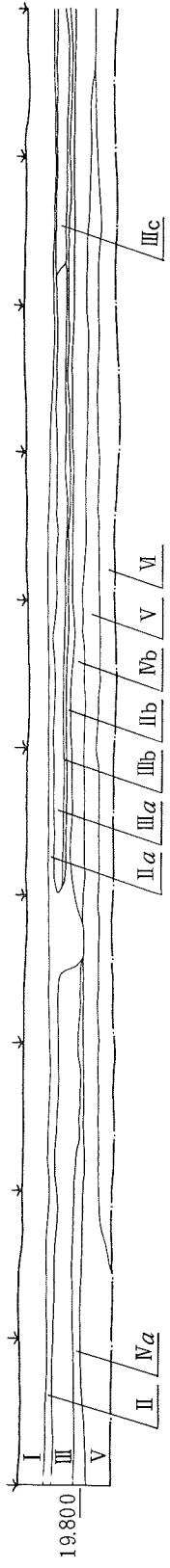
小才木地区と同様の地形をもち窯跡等が予測されたが、結果的にはやはり若干の須恵器等が検出されたにすぎなかった。また、西側の低水田地点では磨製石斧などが検出されたが、特に明確な遺構等は認められなかった。

以上のように、各調査地区での確認調査の結果、才木地区の一本松南側の水田でのみ本調査の必要性が認められた。またその他の各調査地区でも個々には遺物の出土が認められるものの、遺構がほとんど確認されないことなどから本調査の必要性は認められなかった。これは、1つには今回の調査地域が比較的low水田が中心であり、粘質土がベースとなっているため集落等に適さなかったと考えられ、さらに城山丘陵に存在する城山窯跡群と大谷窯跡群の丁度中間にあたることも1つの要因と考えられる。

最後に今回の調査地域の土層の堆積状況について簡単にまとめておく。

基本的にはⅠ～Ⅴ層までであり、それより下位は基盤である。Ⅰ層は5～10cm程度の厚さをもつ耕作土である。Ⅱ層は水田床土であり、淡黄褐色を呈し平均2～3cm程度である。基本的には1枚であるが、金迫地区では部分的に3枚が認められた。Ⅲ層は基本的には茶褐色の粘質土であり、地区によって若干色調は異なる。また小才木地区9トレでは砂質土である。これらはいずれも水田の客土として二次的に搬入もしくは移動されたものと考えられる。遺物を含む。Ⅳ層は黄褐色を呈する粘質土で、Ⅲ層と同様である。しかし、小才木地区9トレでは砂質土である。Ⅴ層は褐色を呈するパイラン土であり、地山土と考えられる。しかし、低水田の角井原地区などではやや粘質であり、小才木地区9トレでは岩盤となっている。遺物はほとんど含まない。

以上の結果、今回の調査区域内で基本的に遺物を含む土層はⅢ、Ⅳ層であり、Ⅴ層以外は含まない。また才木地区で認められた溝状遺構はⅤ層面から掘り込まれており、このⅤ層が当時のベースと考えてよい。但し、ここで述べた土層の堆積状況はあくまで基本的なものであり、各調査地区では若干異なる。これらについては土層図を参照されたい。



— ∞ —

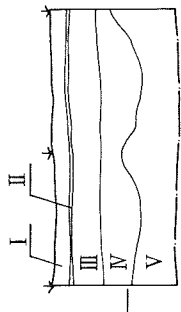


图3 金泊地区 土层图

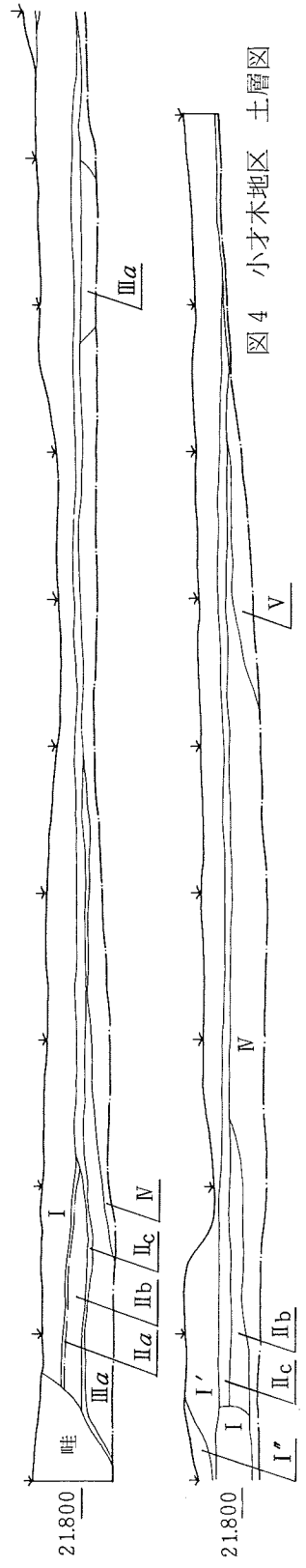
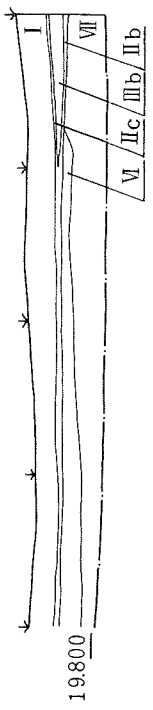


图4 小才木地区 土层图

第3章 遺構と遺物

1 遺構

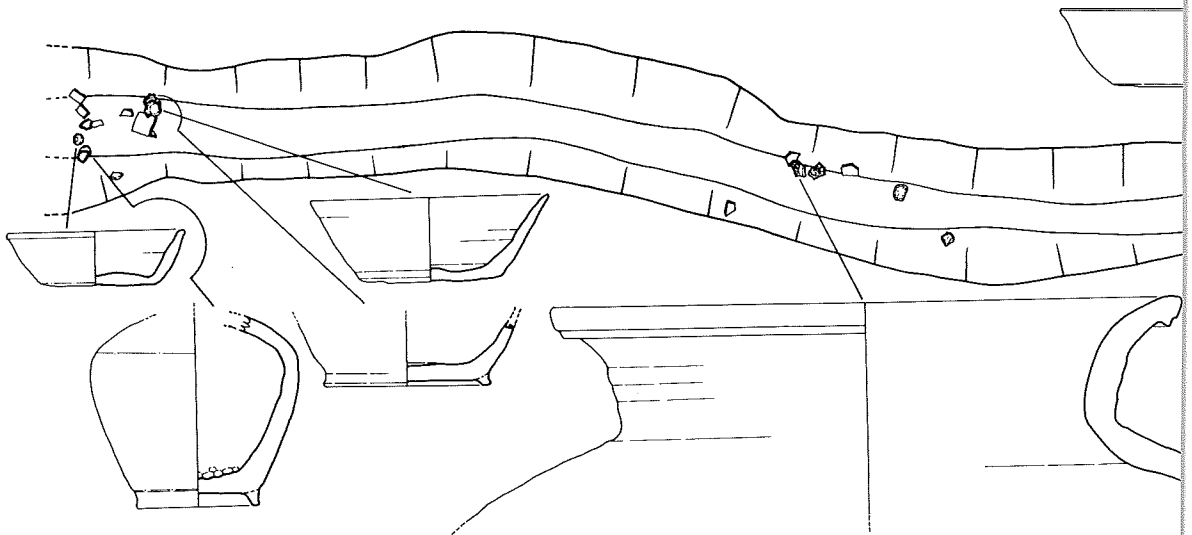
確認調査の結果本調査を行なう必要があると判断された一本松南側について、約2,000㎡の本調査区を設定して本調査を行なった（才木地区）。調査の結果、調査区南側より南北方向に走る溝1条と、北側より二次堆積と思われる土器包含層を検出した。

1) 土器包含層

調査区北側より南北約20m、東西約10mの範囲で須恵器、土師器が集中的に検出された。遺物はⅣ層とⅤ層の間から多く検出され、調査区西側には少なく東側へ向うほど多く遺存していた。これは地形的に西から東へと傾斜しているためと考えられ、さらにⅣ層が水田造成による客土の搬入または移動により形成されたと考えられることなどから、二次的な遺物の包含状況を示すものと思われた。しかし、資料自体には時期差はほとんどなく、そうした意味では二次的な遺物の包含状況でありながら、ほぼ良好な一括資料と考えられた。

2) 溝

溝は調査区南北方向に延び北側は削平により途切れる。全長約18m、巾約0.9m、深さ約1mの規模を有し、西側へ若干のカーブを描く。断面はU字形を呈し、南端は次第に細くなり終結する。流水の方向はレベル差から判断すれば南から北であり、土層図によれば底部に約3～4cm程度砂粒の堆積が見られることから、実際に排水等に利用されたと考えられる。しかし、何の目的によるものかは判明しなかった。



2 遺物

遺物は才木地区の本調査区を主体に出土した。以下その特徴について述べる。尚、詳細については別表の観察表を参照されたい。

1) 土師器

杯

高台の有無により2類に分類される。

A類 高台を有さない平底の杯で細部の相異により更に2類に細分される。

1類 底部はほぼ平坦であり、体部はやや内湾しながら上外方にのび、口唇部で屈曲して外反するもの。

2類 底部はやや丸味をもち、体部はほぼ直線的に上外方にのび、端部は丸くなる。

B類 高台を有するもので、「八」の字状に開いた高台は全面で接する。体部はいずれも上半部を欠いており、全体の形態は知りえない。

皿

口径により2類に分類できる。

A類 口径15cm程度のもので、底部はほぼ平坦であり、体部は直線的に上外方へ開き口唇部では若干外方へ屈折する。端部はやや尖る。

B類 口径が18cmを超えるもので、底部は平坦で体部はやや外反しながら上外方へのびる。端部は丸い。

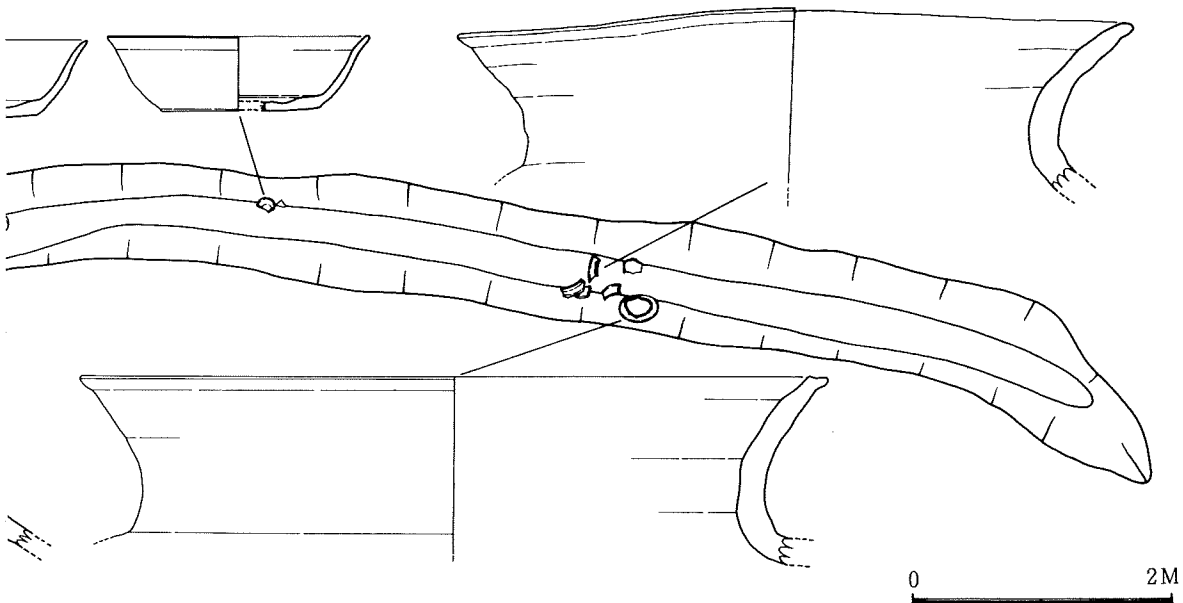


図5 才木遺跡溝実測図及び出土土器

蓋

端部の形状により2類に分類できる。

A類 天井部は平坦で体部は直線的に下方へ開き、端部付近でやや屈曲し端部は断面方形を呈する。つまみの有無は判別できない。

B類 扁平なつまみを有し、体部は湾曲する。口線部は屈曲し水平に延びた後下方に垂下し、端部は尖る。いわゆる「嘴状」を呈するものである。

2) 須 恵 器

杯

高台の有無により2類に分類できる

A類 底部は平坦で、体部はほぼ直線的に上外方へ延びる。高台は有さず、口径の差によりさらに2類に分類される。

1類 口径13～14cm程の一群。

2類 口径10cm程の一群。

B類 高台を有するもので、3類に分類される。

1類 高台は底面に対し垂直気味に延び、体部は若干内湾しながら上外方へ開く。

2類 高台は「八」の字状に開き、体部は若干内湾しながら上外方へ開く。口縁部は屈曲して外反し、端部は細く尖り気味である。

3類 高台は大きく「八」の字状に開き、体部はほぼ直線的に上外方へ開く。

蓋

端部の形状などにより2類に分類される。

A類 端部が「嘴状」を呈するもので、つまみの形状により2類に細分される。

1類 扁平なつまみを有すると考えられるもの。

2類 輪状つまみを有するもの。

B類 端部が比較的ストレートに延びるもので、つまみを有するものとそうでないものがある。

1類 つまみを有するもの。

2類 つまみを有さないもの。

皿

口径により2類に分類される。

A類 口径15cm以下のもので、体部はほぼ直線的に上外方に延びる。

B類 口径16～18cm呈のもので、体部は外反しながら上外方へ延びるものと、直線的に延びるものがある。

1類 体部が外反するもの。

2類 体部が直線的に延びるもの。

この他、甕、壺、鉢、椀などが認められるが、量的に少なく分類しえなかった。

3) 石 器

石器については、ほとんどが才木地区の表採である。

石鏃は6点表採されている。このうち、1, 2については入念な調査加工を施しており、形態的にも古い様相を示している。縄文時代早期もしくは前期頃の所産であろうか。この他刷片石器や、磨製石斧、石核などがみられるが、いずれも散在的であり多くを語りえない。但し、11の剥片についてはホルンフェルスを石材として用いており、旧石器時代の所産と考えられ注目される。

第 4 章 ま と め

ここでは、以上の資料について若干の考察を行ないまとめとしたい。

まず、比較的資料数のまとまっている杯身についてみると、口径13～14.6cm、器高33～5cmの範囲で1つの集中分布を認めることができる。これは佐藤浩司氏が指摘するように、8世紀前半から9世紀中葉に至る法量縮少化の傾向の一端を示すものと言える。また、杯蓋の形状についても同様であり、特に「輪状つまみ」の出現は時期をある程度限定する好資料と言える。

次に器種構成をみると、中心となるのは杯身、杯蓋、皿、甕、壺といった類であり、これに鉄鉢托杯、小型壺といった仏器が伴う。こうした仏器がセットとして出土する例は県下では稀である。

さらに、杯身を中心とした製作手法をみると、資料の遺存状況が悪く明確ではないが外面のヘラケズリはほとんど認め難く、ナデによるものとみられる。

こうした状況を佐藤氏が言う豊前地域の当該時期の特徴と比較した場合、8世紀後半代に類似点を認めることができる。つまり、杯身については須恵器、土師器ともに8世紀中葉～後半にかけての特徴を有し、法量についても、明らかに縮少化の傾向を認めることができる。また、「輪状つまみ」の出現が畿内でも8世紀中葉であることや、前述のように製作手法においてヘラミガキが認められ難い点などを考え合せると、本資料については8世紀後半代の時期を与えることができるのではなかろうか。

但し、該期の資料が豊前地域では著しく不足している点も事実で、今後資料の蓄積によってさらに検討されるべきである。

以上、簡単ではあるが、本遺跡出土資料について概観した。資料数が少ない等、問題もあるが、一応律令期における土器様式の一端に触れることができたと考える。先学諸氏の御指導、御鞭撻をお願いする次第である。

注1 佐藤浩司(1987)「奈良時代の須恵器と土師器」(東アジアの考古学と歴史 下)

注2 注1に同じ

注3 西弘海(1982)「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集)

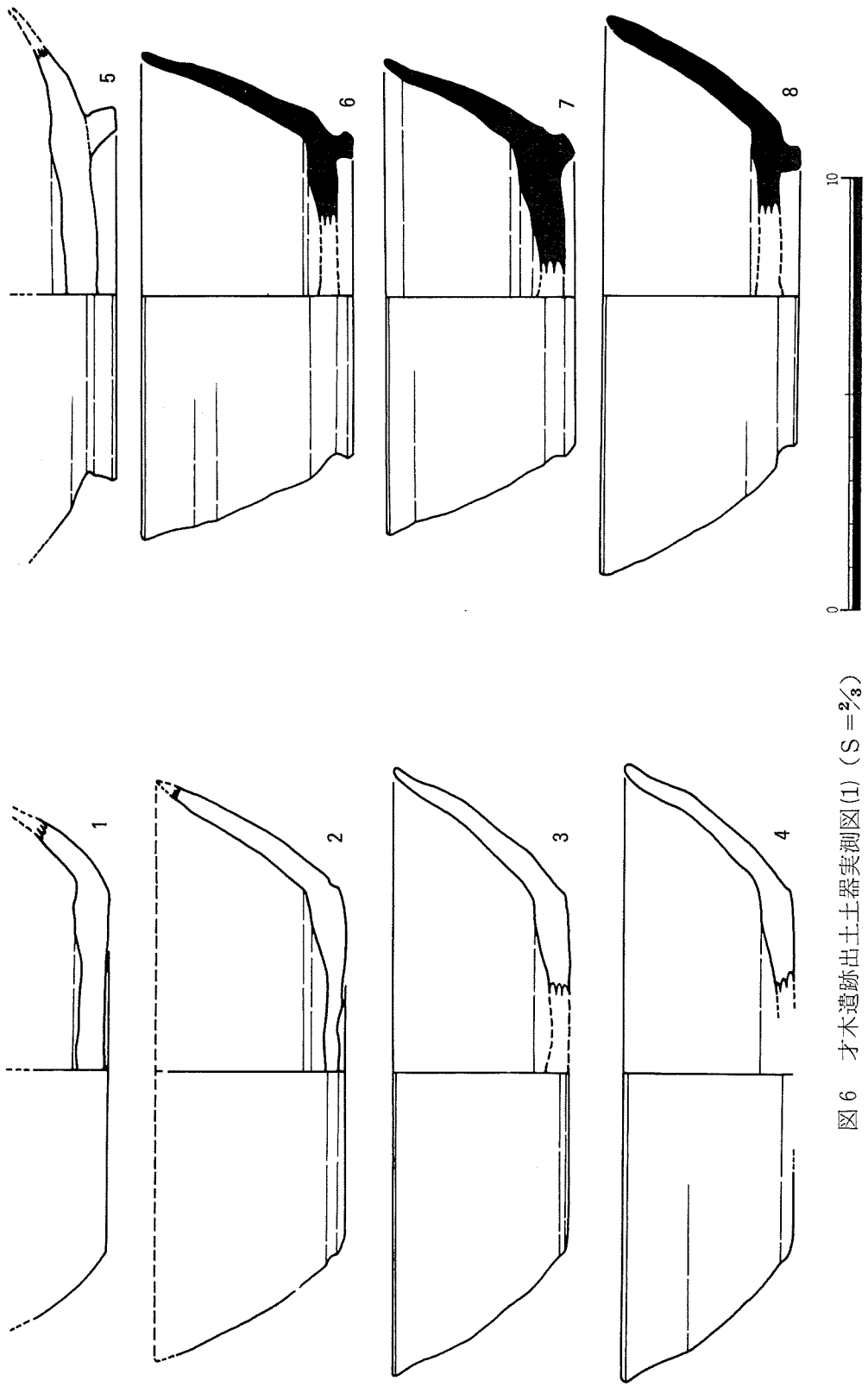


图6 才木遺跡出土土器実測図(1) (S = 2/3)

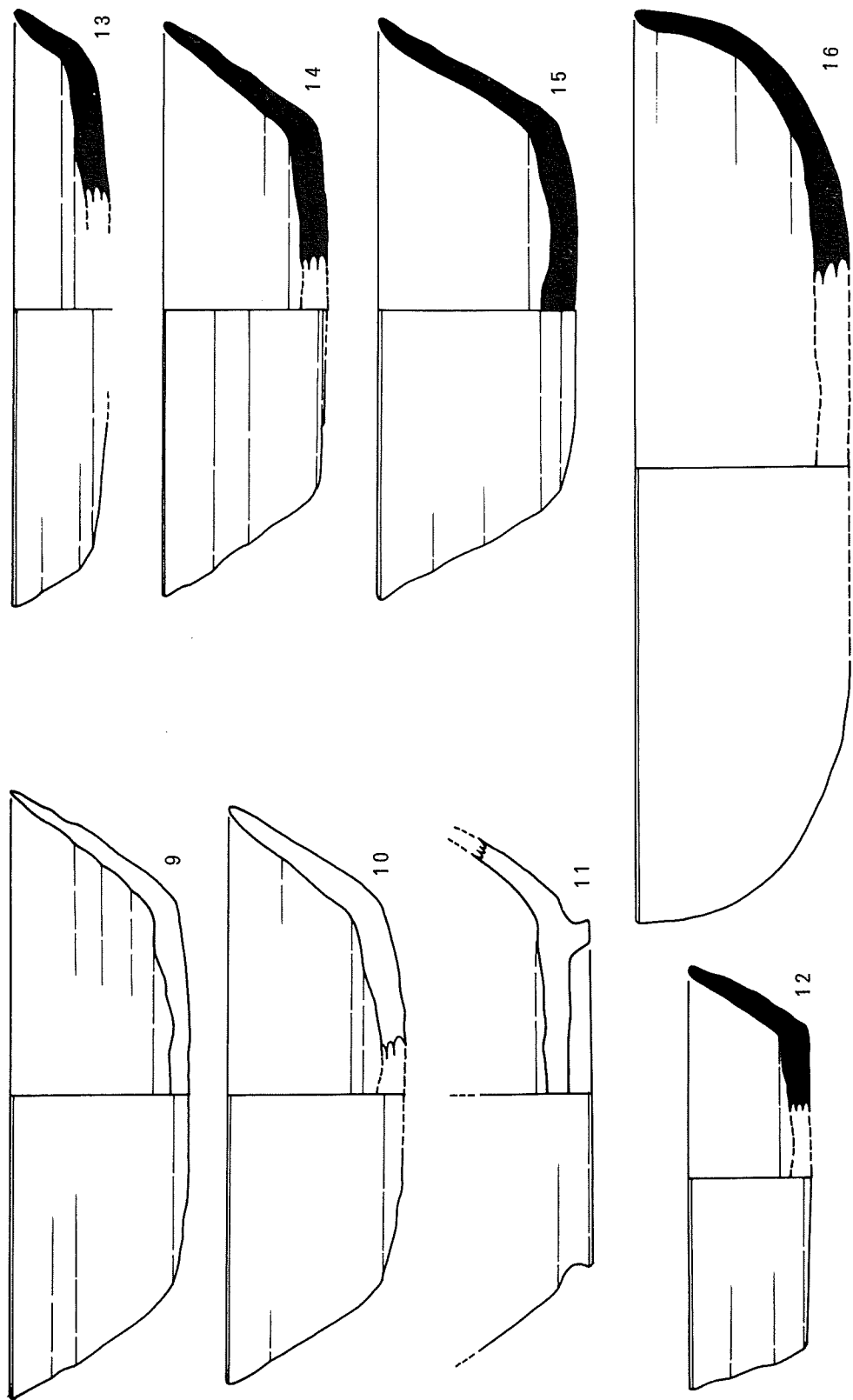


图7 才木遗迹出土土器实测图(2) (S = $\frac{2}{3}$)

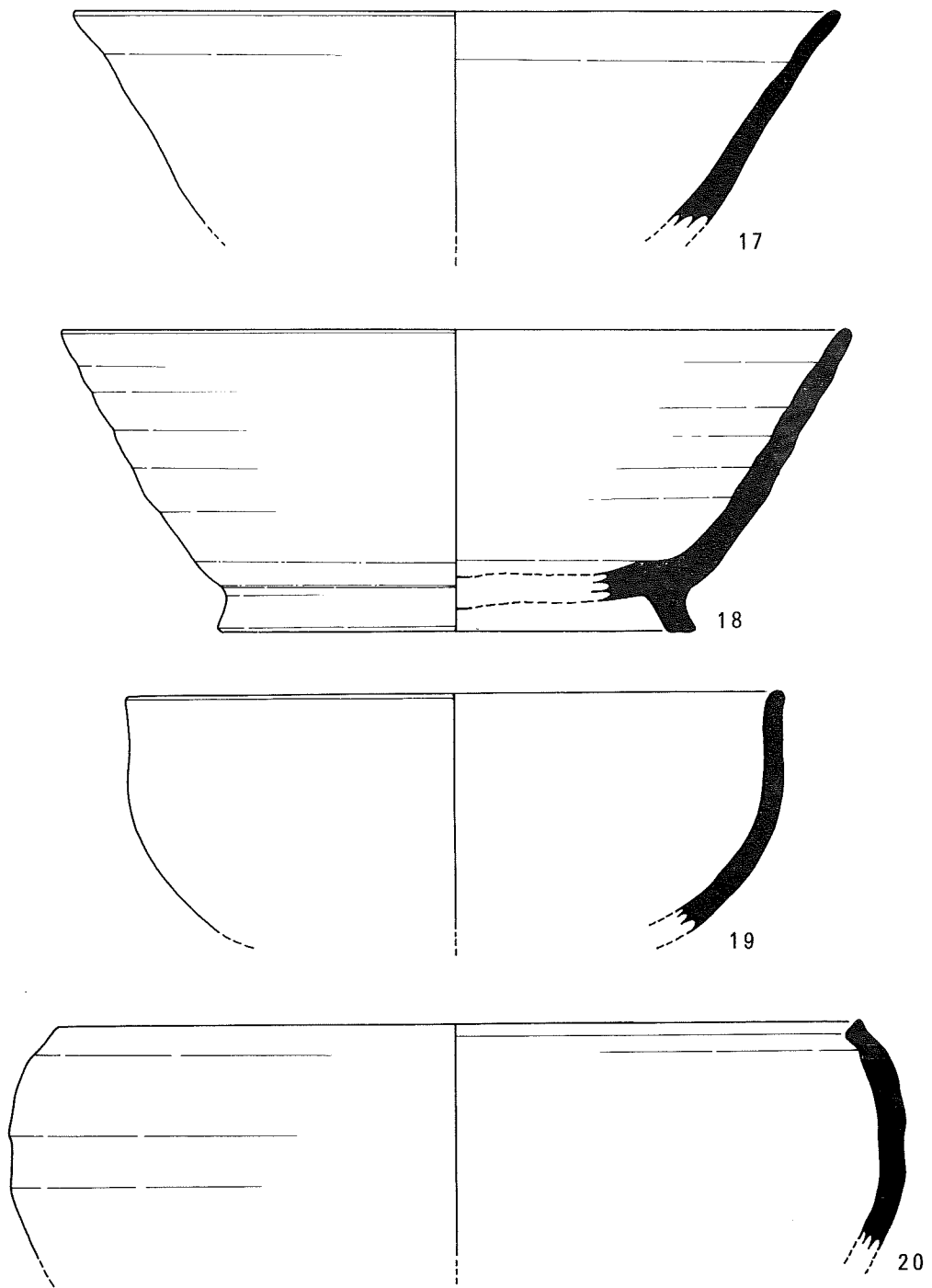


图8 才木遺跡出土土器実測図(3) ($S = \frac{2}{3}$)



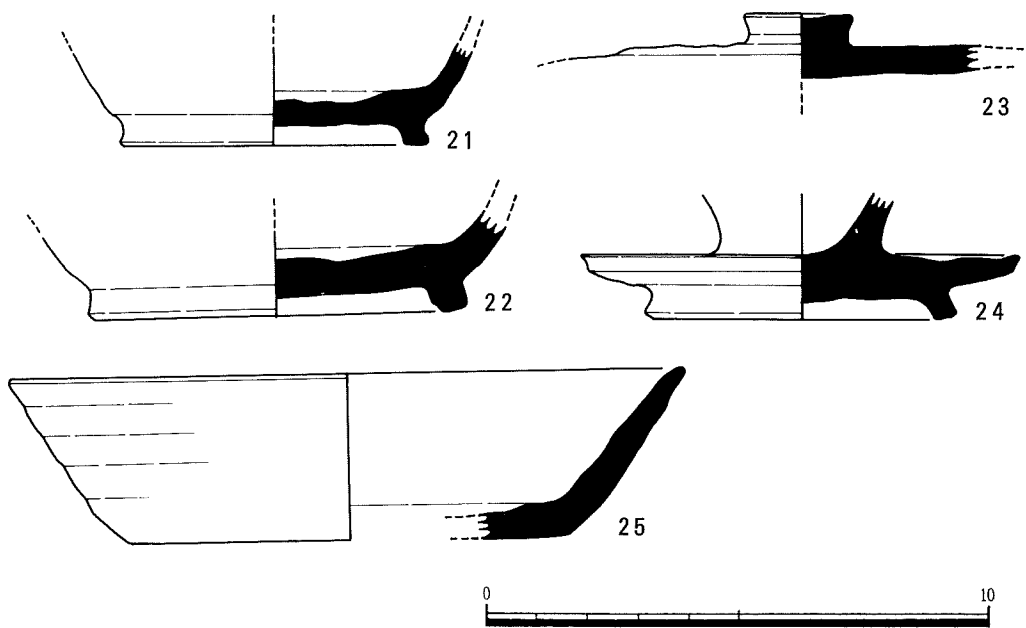


图9 才木遺跡出土土器実測図(4) ($S = \frac{2}{3}$)

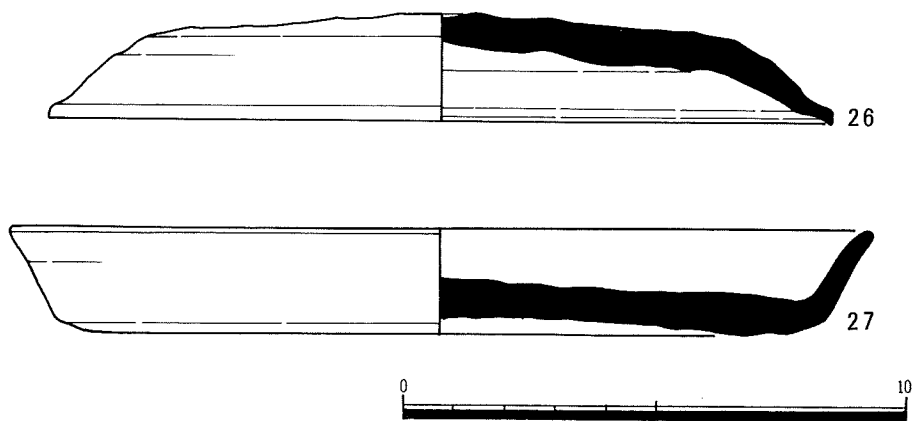


图10 金迫地区出土土器実測図 ($S = \frac{2}{3}$)

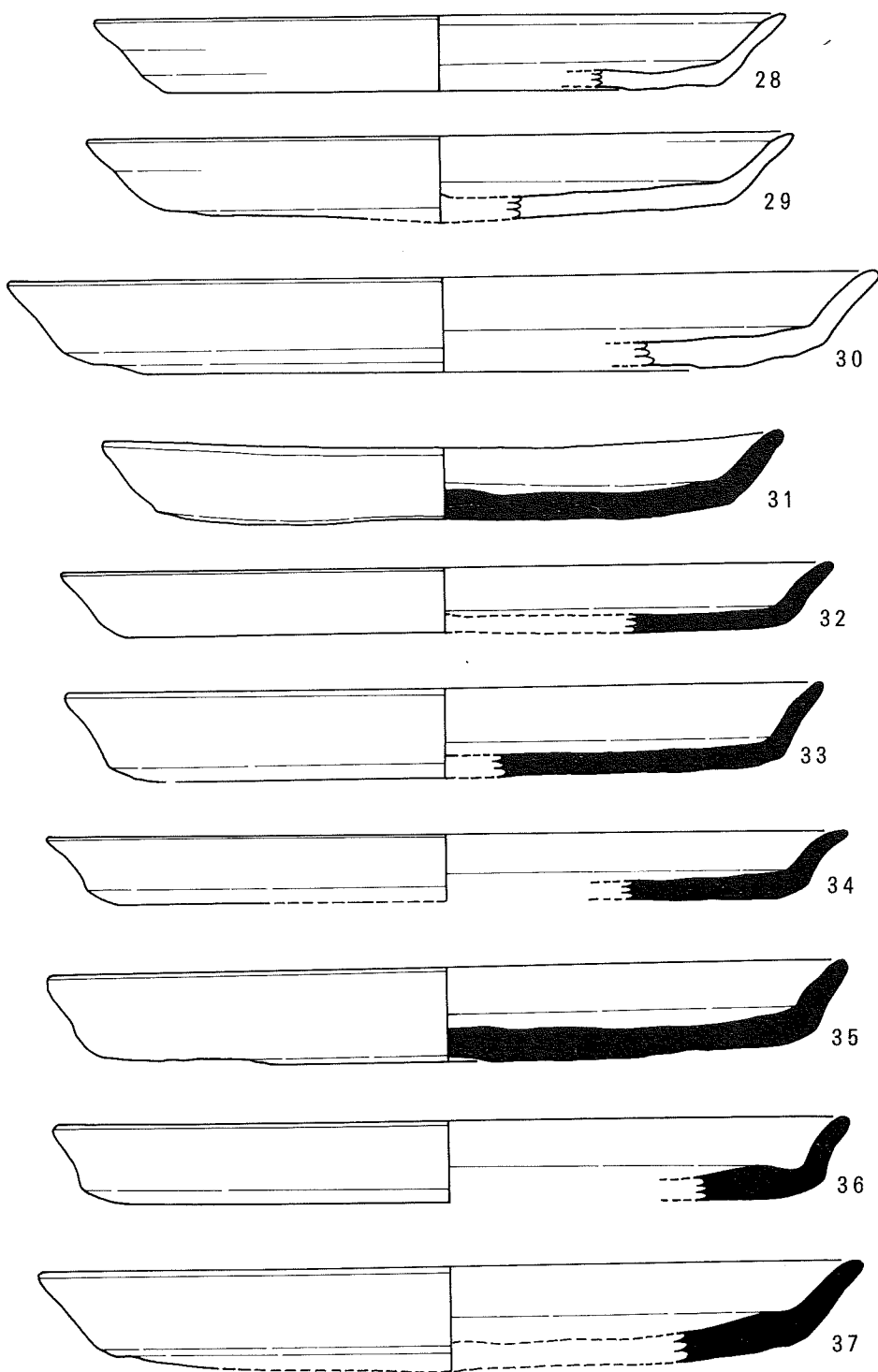


图11 才木遺跡出土土器実測図(5) ($S = \frac{2}{3}$)



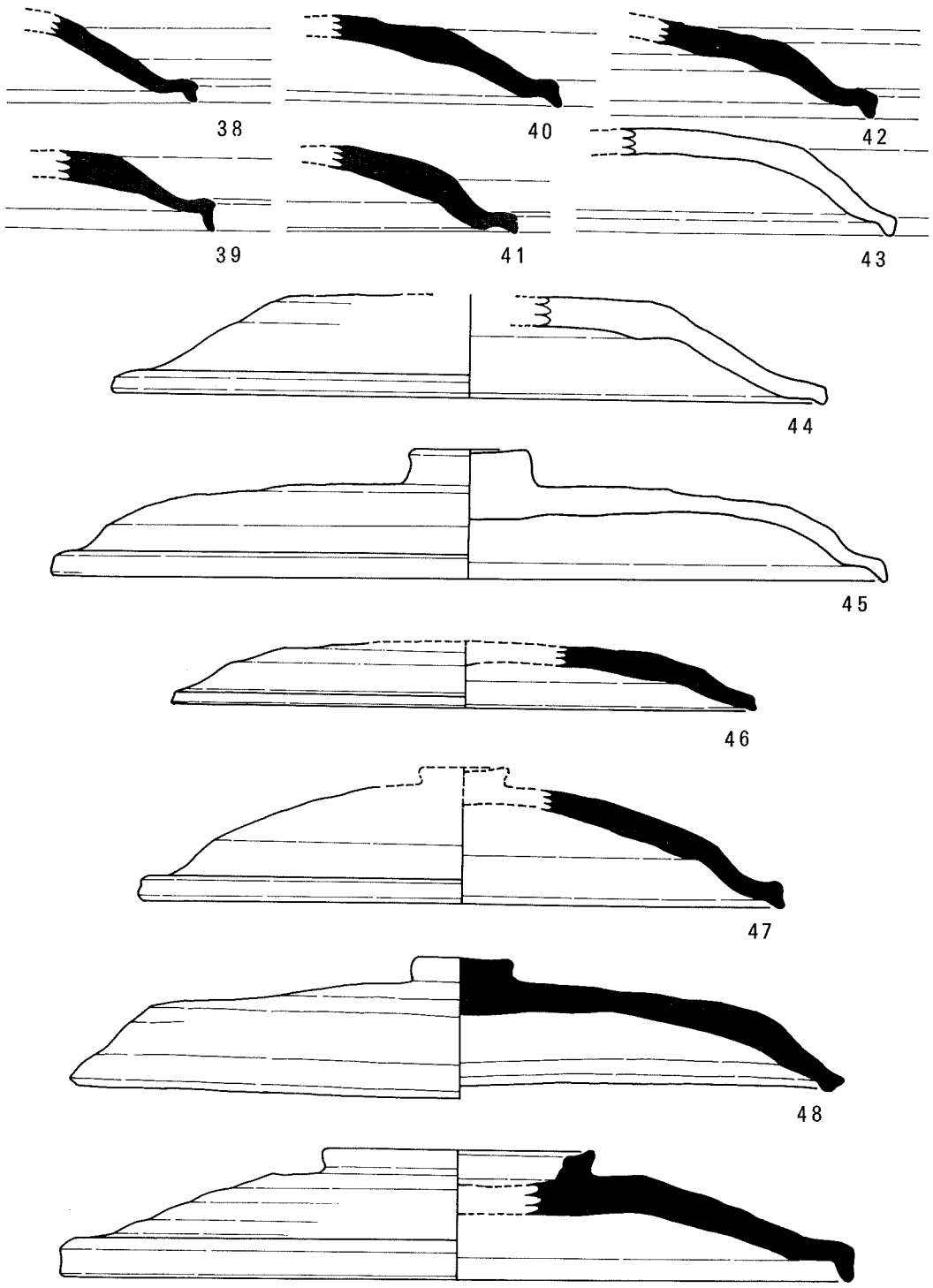


图12 才木遺跡出土土器実測図(6) ($S = \frac{2}{3}$)



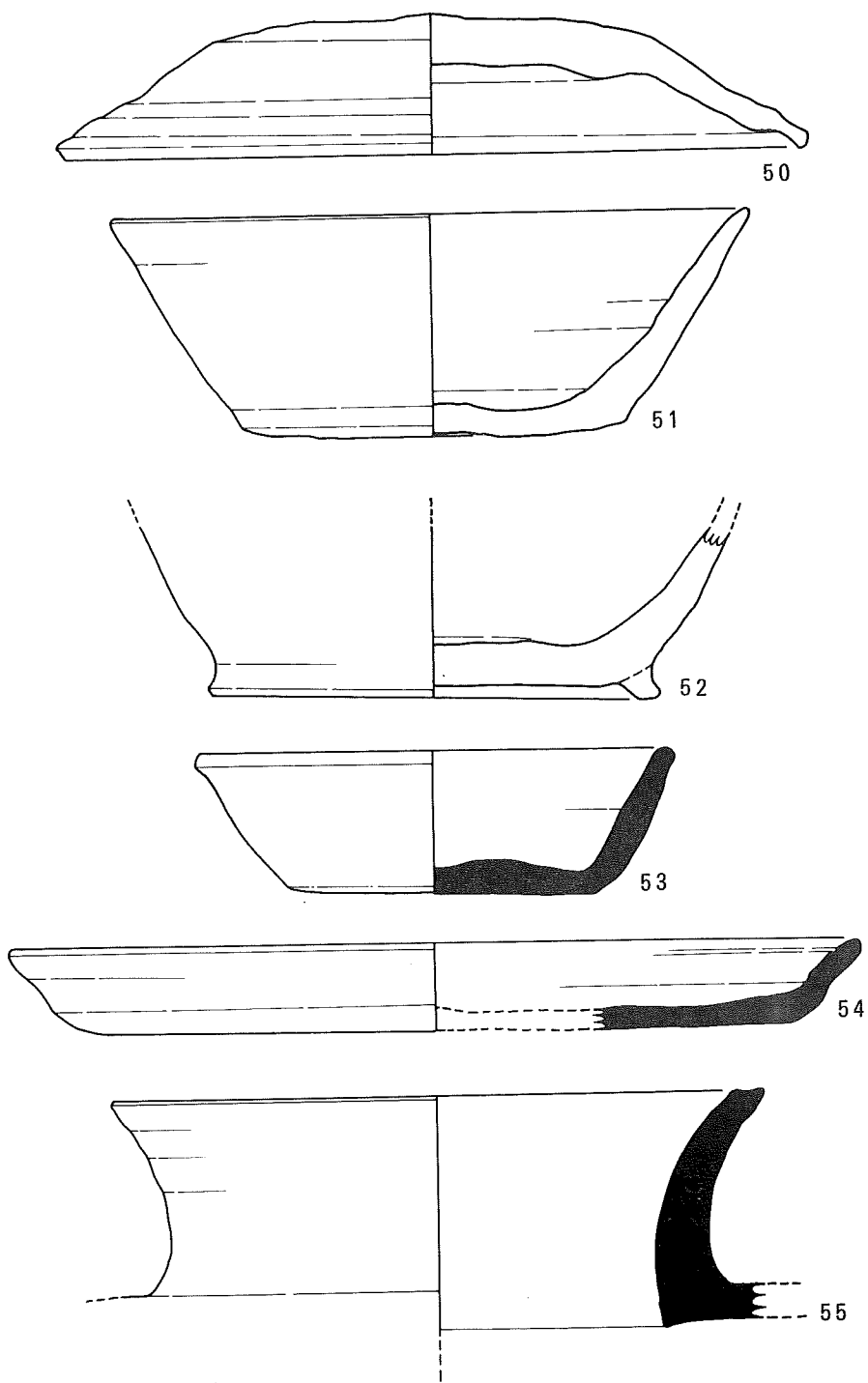
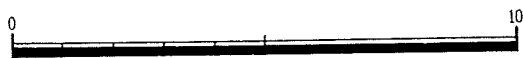
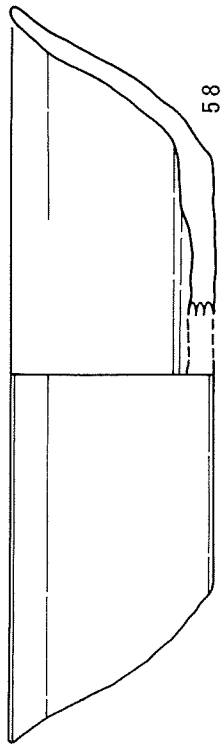
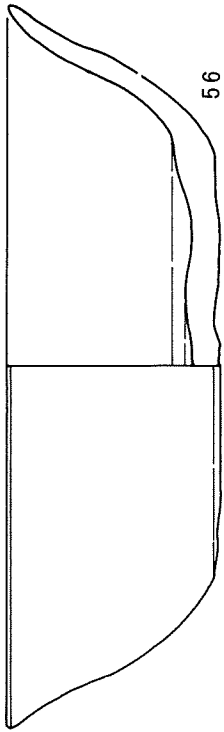


图13 才木遺跡溝内出土土器実測図(1) (S = $\frac{2}{3}$)

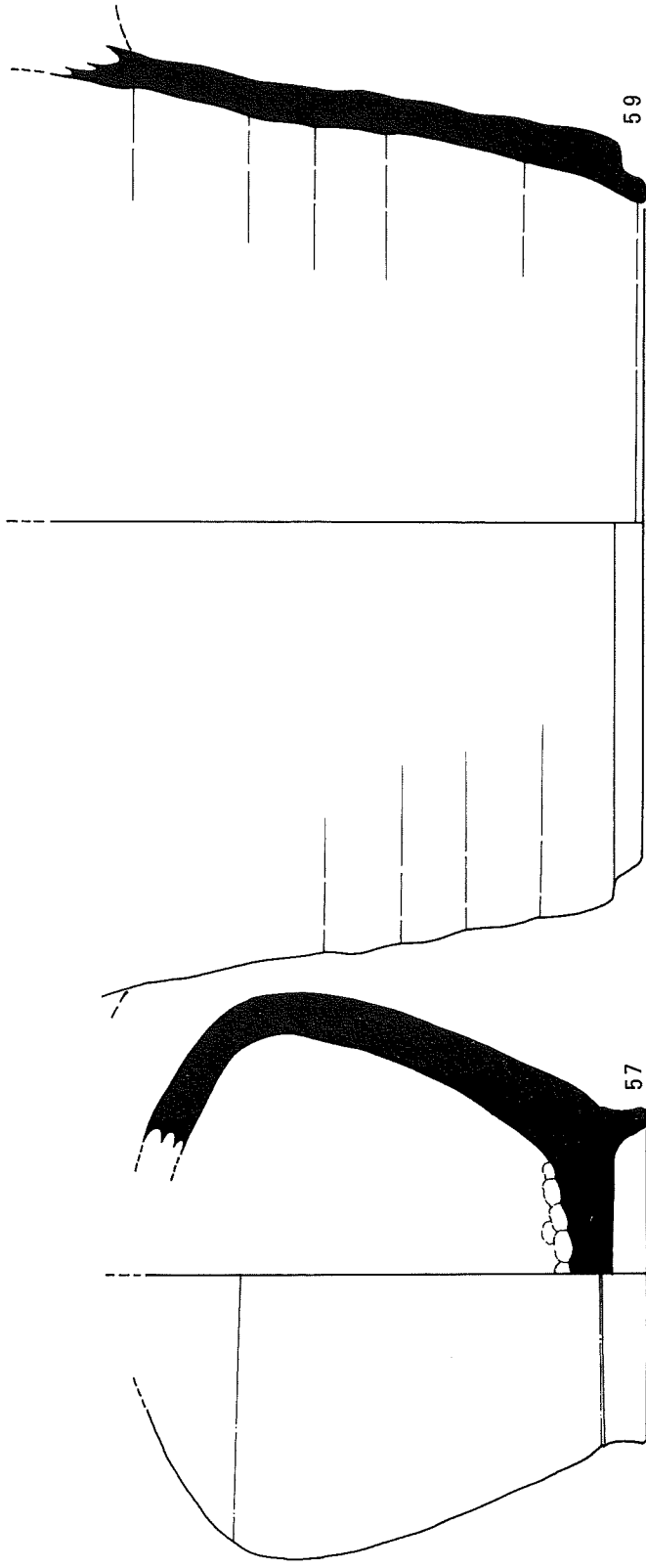




58



56



59

57



图14 才木遺跡溝内出土器実測图(2) ($S = \frac{2}{3}$)

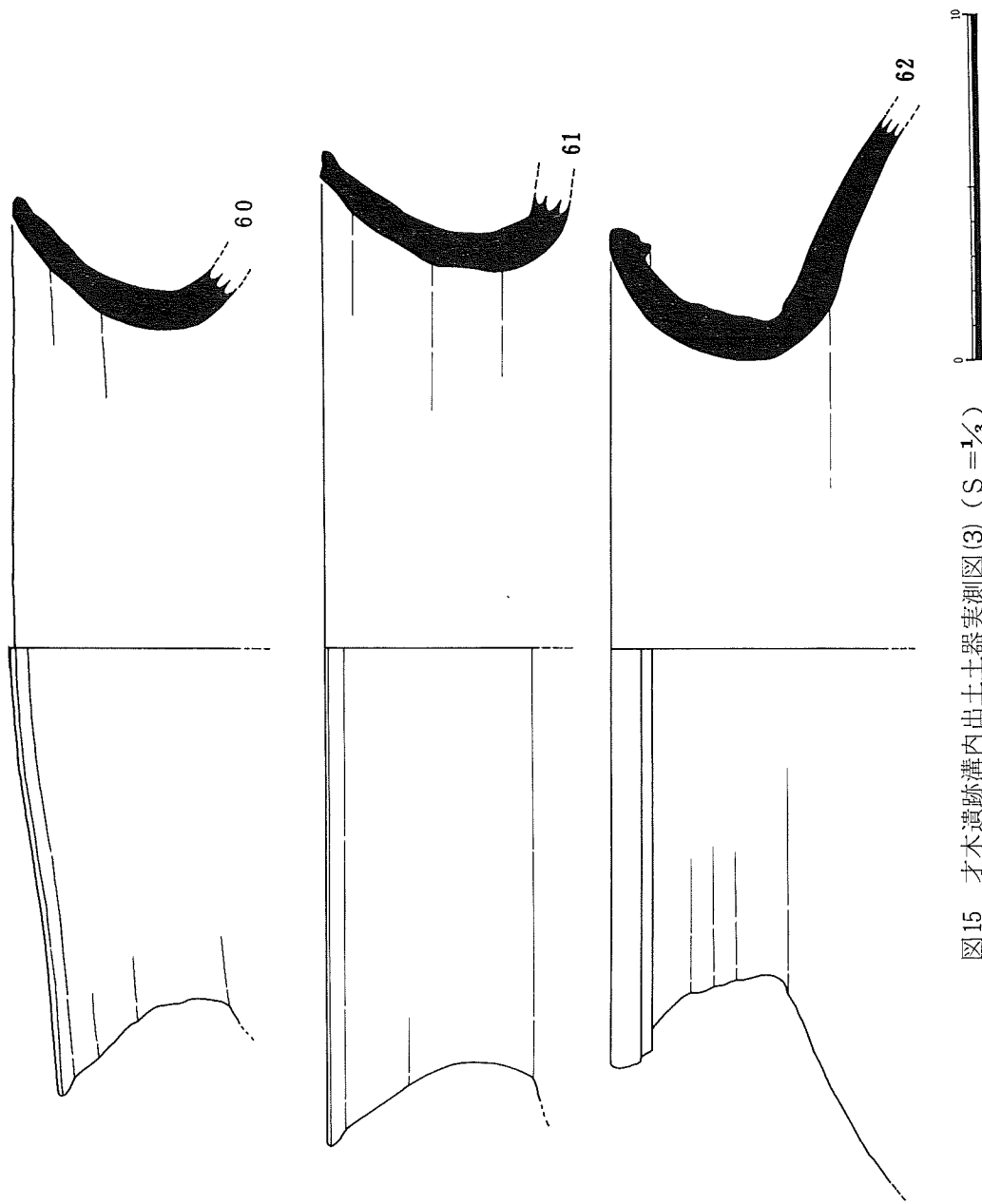


图15 才木遗迹沟内出土土器实测图(3) ($S = \frac{1}{3}$)

土器観察表 (1)

No	図版 挿図 No	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
1	図 6	环身	才木遺跡 土器包含地点	底部径 8.2	底部は平らで、僅かに上げ底気味になっている。体部はやや湾曲気味にのびるが、上半部は欠損しており不明。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。全体に不明瞭	A. 淡褐色 B. 軟 質 C. 精 緻 D. 35%	A-1
2	図 6	同上	同 上	口 径(1.3.6) 器 高(4.5) 底部径(8.6)	底部は平らで、体部との境は凹線状に凹む。体部は内湾気味に上外方にのび口縁部はやや外反する。端部欠損。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。全体に不明瞭。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 30%	A-1
3	図版 5 図 6	同上	同 上	口 径(1.4.2) 器 高(4.1) 底部径(8.2)	底部は平らで、体部は内湾し上外方にのびる。口縁部はやや外反し、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。全体に不明瞭。	A. 黄褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 20%	A-1
4	図版 5 図 6	同上	同 上	口 径(1.4.4) 器 高(5.0) 底部径(8.6)	底部は平らで、体部との境は粘土のはみ出しがみられる。体部は内湾しながら上外方へのび、口縁部はやや外反する。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 黄褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 20%	A-1
5	図 6	同上	同 上	高台径(9.2)	底部は平らで、やや内側に八の字形の高台をもつ。高台端部は平面で、全面で接地する。体部は大きく上外方へのび、上半は欠損している。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後一方のナデを行なうが、粘土巻上げ痕を残す。	A. 茶褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 35%	B
6	図 6	同上	同 上	口 径(1.1.2) 器 高 5.0 高台径(7.4) 高台高 0.4	底部は平らで、若干内側に八の字形の高台をもつ。高台端部は内側で若干上がり、外側で接地する。体部は直線的に上外方へのび端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なうが、わずかに粘土巻上げ痕を残す。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 30%	B-2
7	図 6	同上	同 上	口 径(1.1.0) 器 高 4.4 高台径(7.4) 高台高 0.4	底部は平らで、底部端に八の字形の高台をもつ。高台端部は平面で内側で接地する。体部は内湾気味に上外方にのび口縁部はわずかに外反する。端部丸。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 20%	B-2
8	図 6	同上	同 上	口 径(1.3.0) 器 高 4.6 高台径(7.0) 高台高 0.5	底部は平らで、やや内側に垂下する高台をもつ。高台端部は平面で全面で接地する。体部は若干内湾気味に上外方にのび、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 20%	B-1
9	図版 5 図 7	同上	同 上	口 径(1.4.0) 器 高 4.1 底部径(8.8)	底部はやや丸味をもち、体部は若干内湾気味に上外方へのびる。端部はかなり細くなり尖り気味となる。全体に薄手に仕上げられる。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。全体に不明瞭。	A. 黄褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 40%	A-2
10	図版 5 図 7	同上	同 上	口 径(1.3.2) 器 高(4.1) 底部径(8.8)	底部は丸味をもち、体部はほぼ直線的に上外方にのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 茶褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 40%	A-2
11	図 7	同上	同 上	高台径(8.0) 高台高 0.5	底部は平らで、やや内側に八の字形の高台をもつ。高台端部は平面で全面で接地する。体部はほぼ直線的にのびるが、上半部は欠損する。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 20%	B

土器観察表 (2)

No	図版挿図No	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
12	図版 5 図 7	坏身	才木遺跡 土器包含地点	口 径 9.8 器 高 2.8 底部径 7.0	底部は平らで、体部は途中やや変化するもののほぼ直線的に上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ヨコナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. やや粗 D. 75%	A-2
13	図版 5 図 7	皿	同 上	口 径(13.8) 器 高(2.3) 底部径(11.2)	底部はやや丸味をもつ。体部は上外方に短かくのび、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。		
14	図版 5 図 7	坏身	同 上	口 径(13.2) 器 高(3.8) 底部径(8.8)	底部はほぼ平らで、体部はほぼ直線的に上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデ、底部はヘラキリ後ナデを行なうものの、粘土巻上げ痕を残す。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 30%	A-1
15	図版 5 図 7	同上	同 上	口 径(13.4) 器 高 4.6 底部径(8.4)	底部はやや丸味を持ち、中央部でやや凹む。体部は直線的に上外方へのび、口縁部でやや外反する。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 茶褐色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 40%	A-1
16	図版 5 図 7	盤	同 上	口 径(21.1) 器 高(5.0)	底部は平らで、体部は底部との境はなく大きく内湾しながら上外方へのびる。端部は丸い。	内面体部及び外面体部上半はヨコナデを行ない、他は一方のナデを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 20%	
17	図 8	坏身	同 上	口 径(16.6) 器 高(6.0)	底部は欠損。体部は直線的に上外方へ大きく開き、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 10%程度	B-3
18	図版 5 図 8	同上	同 上	口 径(17.2) 器 高 6.5 高台径(10.4) 高台高 0.8	底部はほぼ平らで、底部端に八字形高台を有する。高台端部は平面で全面で接地する。体部はほぼ直線的に上外方へのび、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なうが、体部下端はヘラケズリを行なう。底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 灰 色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 20%	B-3
19	図 8	碗	同 上	口 径(14.4)	底部は欠損。体部は大きく内湾しながら上外方へのび、口縁部ではほぼ直立する。端部は丸い。全体にかなりヒズミが激しい。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 20%	
20	図 8	鉄鉢	同 上	口 径(17.6) 体部最大径 (19.4)	底部は欠損。体部は球形を程し、口縁部は内傾する。端部は方形をなす。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 10%	
21	図 9	坏身	同 上	高台径(6.2) 高台高 0.4	底部は平らで、底部端に八字形の高台を有する。高台端部は平面で、全面で接地する。体部はほぼ直線的に上外方へのびるが、上半部は欠損。	内、外面ともヨコナデを行なう。底部はヘラキリ後ナデ。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 30%	B-2
22	図 9	同上	同 上	高台径(7.6) 高台高 0.5	底部はほぼ平らで、底部端に八字形高台を有する。高台端部はやや丸味をもち、内側で接地する。体部は欠損している。	内、外面ともヨコナデを行なう。底部はヘラキリ後ナデ。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 15%	B-1

土器観察表 (3)

No.	図版挿入No.	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
23	図 9	坏蓋	才木遺跡 土器包含地点	つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部は平らで粘土痕を残す。天井部中央には扁平で中央がやや凹んだつまみを有する。口縁部欠損。	内面中央部はヨコナデを行なった後、一方向のナデを行なう。外面天井部はヘラキリ後ナデを行なうが、粘土痕を残す。つまみはヨコナデ。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 20%	
24	図版 6 図 9	托坏	同 上	坏部最大径 (8.8) 高台径(6.2) 高台高(0.5)	底部はほぼ平らで内側に八の字形高台を有する。高台端部は平面で内側で接地する。坏部張り出しはやや上方に向き、壺状の器形が組み合うと考える。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 50%	
25	図 9	坏身	同 上	口 径(13.4) 器 高 3.3 底部径(8.8)	底部は平らで、体部はほぼ直線的に上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 15%	A-1
26	図版 6 図 10	坏蓋	金迫地区	口 径(15.8) 器 高 2.1	天井部は丸く、体部は下外方へほぼ直線的のびる。口縁部は屈曲して外方のび、端部は尖り気味で方形をなす。	内、外面ともヨコナデを行ない、天井部はヘラキリ後粗いナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 55%	B-2
27	図版 6 図 6	皿	同 上	口 径 17.2 器 高 2.1 底部径 13.8	底部は平らで、中央部で浅く突起している。体部は短かく上外方へのび、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 80%	B-1
28	図版 6 図 11	同上	同 上	口 径(14.8) 器 高 1.6 底部径(12.0)	底部はほぼ平らで、体部は短かく上外方へのびる。口縁部は僅かに外反し、端部は尖り気味。	内、外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ後ナデを行なうが、全体として不明瞭である。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 10%	A
29	図 11	同上	同 上	口 径(15.0) 器 高(1.8) 底部径(12.0)	底部は中央部に向け浅く凹む。体部は短かく上外方へのび、口縁部はやや肥厚する。端部は丸い。	内、外面とも風化が著しく明瞭ではないが、ヨコナデと考えられる。	A. 赤褐色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 40%	A
30	図版 6 図 11	同上	同 上	口 径(18.6) 器 高 2.0 底部径(16.2)	底部はやや丸味をもち、体部はやや外反しながら短かく上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 15%	B
31	図 11	同上	同 上	口 径(14.6) 器 高 1.7 底部径(12.4)	底部はほぼ平らで、体部は短かく上外方へのびる。口縁部は僅かに肥厚し端部は丸い。全体にかなり焼き歪みが認められる。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 25%	A
32	図 11	同上	同 上	口 径(16.6) 器 高 1.4 底部径(14.0)	底部は平らで、体部は短かく外反しながら上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 10%	B-1
33	図版 6 図 11	同上	同 上	口 径(16.2) 器 高 1.9 底部径(13.0)	底部はやや丸味をもち、体部は若干外反しながら上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 10%	B-1

土器観察表 (4)

No	図版挿入	No	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
34	図 11	皿	才木遺跡 土器包含地点		口 径(17.0) 器 高 1.5 底部径(14.0)	底部は平らで、体部は下半で反転した後、外反しながら短かく上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. やや粗 D. 10%	B-1
35	図 11	同上	同上		口 径(17.0) 器 高 2.0 底部径(14.2)	底部はほぼ平らだが、若干凹凸がみられる。体部は下半で反転し外反気味に短かく上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なうが、底面中央部はヘラキリ未調整、周囲はナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 30%	B-2
36	図 11	同上	同上		口 径(17.0) 器 高 1.7 底部径(14.0)	底部はほぼ平らと思われる。体部は下半で反転し、外反しながら短かく上外方へのびる。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 10%	B-1
37	図 11	同上	同上		口 径(17.6) 器 高(2.2) 底部径(14.4)	底部は丸味をもつ。体部は下半で反転し、外反しながら上外方へのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 10%	B-2
38	図 12	坏蓋	同上		—	天井部中央は欠損。口縁部は外方へ水平にのび、屈曲して垂下する。端部は尖る。	天井部は回転ヘラケズリを行ない、他は内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 5%	
39	図 12	同上	同上		—	天井部中央は欠損。天井部は途中屈曲し、口縁部では水平にのび屈曲して垂下する。端部は尖る。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 5%	
40	図 12	同上	同上		—	天井部中央は欠損。天井部は途中屈曲し、口縁部では水平にのび屈曲して垂下する。端部は丸味をもつ。	内、外面ともヨコナデを行なう。天井部平坦部周辺はナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 10%	
41	図 12	同上	同上		—	天井部中央は欠損。天井部は丸味をもち、途中屈曲し口縁部では水平にのび屈曲して下降する。端部は丸味をもつ。	内、外面ともヨコナデを行ない、天井部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 5%	
42	図 12	同上	同上		—	天井部中央は欠損。天井部は途中屈曲し、口縁部では水平にのびやや隆起して垂下する。端部は丸味をもつ。	内、外面ともヨコナデを行ない、天井部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 5%	A
43	図 12	同上	同上		—	天井部中央は欠損。天井部は丸味をもち屈曲して口縁部へ下降する。口縁部はやや外方へ屈曲し、さらに屈曲して垂下する。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、天井部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡褐色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 30%	A
44	図版 6 図 12	同上	同上		口 径(16.2) 器 高 2.3	天井部中央は平らで、屈曲して下外方へ直線的にのびる。口縁部はほぼ水平にのび屈曲して垂下する。端部は丸くなる。	内、外面ともヨコナデと考えられるが風化が著しく不明瞭。	A. 褐色、但し内面は中央部以外黒色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 45%	A

土器観察表 (5)

No	図版挿図	No	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
45	図版 6 図 12		坏蓋	才木遺跡 土器包含地点	口 径(1.9.0) 器 高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	天井部中央は平らでカーブを描きながら口縁部へ至る。口縁部はほぼ水平にのびた後、屈曲して垂下する。端部は丸い。つまみは断平方形をなす。	内、外面とも朱が塗られており明確でないが、ヨコナデを施すと考えられる。	A. 赤褐色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 40%	B
46	図版 6 図 12		同上	同上	口 径(1.3.2) 器 高(1.5)	天井部中央は欠損。天井部は丸くやや反転しながら口縁部へ至る。端部は屈曲してわずかに垂下する。端部は丸い。	天井部上半は回転ヘラケズリ。他は内外面ともヨコナデ。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 25%	B-1
47	図版 6 図 12		同上	同上	口 径(1.4.4) 器 高(2.6)	天井部中央は欠損。天井部は丸くカーブを描き途中で反転し口縁部へ至る。端部は屈曲し下方へ降る。端部は丸い。つまみを有すると考えられる。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 灰 色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 15%	A-1
48	図版 7 図 12		同上	同上	口 径 17.6 器 高 2.8 つまみ径 1.4 つまみ高 0.6	天井部は直線的にやや下方へのび途中で屈曲して端部へ至る。端部はやや肥厚し丸くなる。つまみは不整形で扁平である。全体に垂んでいる。	内、外面ともヨコナデを行ない、天井部はヘラキリ後ナデ。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 砂粒含む D. 80%	B-2
49	図版 7 図 12		同上	同上	口 径(1.8.0) 器 高 2.9 つまみ径(6.2) つまみ高 0.6	天井部は平らで途中で屈曲して直線的に口縁部へ至る。口縁部は水平にのび屈曲して垂下する。端部は尖り気味。天井部中央には輪状つまみを有する。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 淡灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 25%	A-2
50	図版 7 図 13		同上	才木遺跡 溝内一括	口 径 15.6 器 高 2.9	天井部は丸くカーブを描き端部に至る。端部は方形をなす。	内面及び外面下半 $\frac{1}{2}$ はヨコナデを行なう。外面中程はヘラケズリの可能性があるが明確でない、外面中央部はヘラキリ後ナデを行なう。	A. 淡茶褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 70%	B
51	図版 7 図 13		坏身	同上	口 径 13.2 器 高 4.6 底部径 8.0	底部は平らで、体部は直線的に上外方へ大きくのびる。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリを行なう。	A. 茶褐色 B. やや軟質 C. やや粗 D. 60%	A-1
52	図版 7 図 13		同上	同上	高台径 9.4 高台高 0.4	底部は平らで、底部端に八の字状の高台を有する。高台端はやや丸味をもち内側で接地する。体部はほぼ直線的に上外方へのびるが、上半部は欠損。	内、外面ともヨコナデを行なう。底部は不明。	A. 淡褐色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 50%	B
53	図版 7 図 13		同上	同上	口 径 10.0 器 高 3.0 底部径 6.6	底部は平らで、体部はやや内湾しながら上外方へのびる。端部はやや肥厚し丸い。	内、外面ともヨコナデを行なうが、底部はヘラキリ後手持ちヘラケズリを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. やや粗 D. 100%	A-2
54	図版 7 図 13		皿	同上	口 径(17.6) 器 高 1.8	底部は平らで、体部は反転した後外反しながら短かく上外方へのびる。端部は丸く内面に一条の刻線を有する。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後、ナデを行なう。	A. 茶褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 30%	B-1
55	図版 7 図 13		甕	同上	口 径 13.5 頸部径 12.0 頸部高 4.6	口頸部のみ。端部は方形をなし、外反して頸部へ至る。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 淡茶褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 100%(口頸部)	

土器観察表 (6)

No	図版 挿図 No	器種	出土地点	法 量	形 態	技 法	備 考	分類
56	図版 7 図 14	坏身	才木遺跡 溝内一括	口 径 (14.4) 器 高 4.2 底部径 (8.4)	底部はほぼ平らだが、やや凹凸がみられる。体部はやや内湾しながら上外方へのび、口縁部でやや外反する。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行ない、底部はヘラキリ後ヨコナデを行なう。	A. 淡茶褐色 B. やや軟質 C. 砂粒含む D. 35%	A-1
57	図版 7 図 14	壺	同 上	体部最大径 11.4 高台径 6.8 高台高 0.7	底部は平らで、底部端に八の字形の高台を有する。高台端部は平面で全面で接地する。体部はやや内湾しながら上外方へのび肩部で内傾する。頸部欠損。	内面体部はヨコナデを行ない、底部は指圧による。外面は体部に回転ヘラケズリを行ない、底部はヘラキリ後ナデを行なう。他はヨコナデ。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 80%	
58	図 14	坏身	同 上	口 径 (14.6) 器 高 4.1 底部径 (8.6)	底部は平らで、体部はやや内湾しながら上外方へのび、口縁部ではやや外反する。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なうが、底部はヘラキリ後未調整。	A. 淡茶褐色 B. やや軟質 C. 精 緻 D. 45%	A-1
59	図 14	?	同 上	体部最大径 (19.2) 底部径 (13.3)	体部下半のみで他は欠損。下半部はほぼ直線的に下方へしばまりながらのび底部は空洞となる。底部端は二段になり端部は丸い。把手がつくとと思われる。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 暗灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 10%	
60	図版 8 図 15	甕	同 上	口 径 29.5 頸基部径 25.6	口頸部のみ残存し大きく外反しながら上外方へのびる。口縁部はやや外方へ張り出し、端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 口頸部のみ	
61	図版 8 図 15	同上	同 上	口 径 26.2 頸基部径 26.4	口頸部のみ残存し、大きく外反しながら上外方へのびる。端部はやや方形をなす。全体に歪みが著しい。	内、外面ともヨコナデ。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 口頸部のみ	
62	図版 8 図 15	同上	同 上	口 径 25.2 頸基部径 20.0	口頸部のみ残存し、大きく外反しながら上外方へのびる。口縁部は下方へ張り出し、凹面をなす。端部は丸い。	内、外面ともヨコナデを行なう。	A. 青灰色 B. 硬 質 C. 精 緻 D. 口頸部のみ	

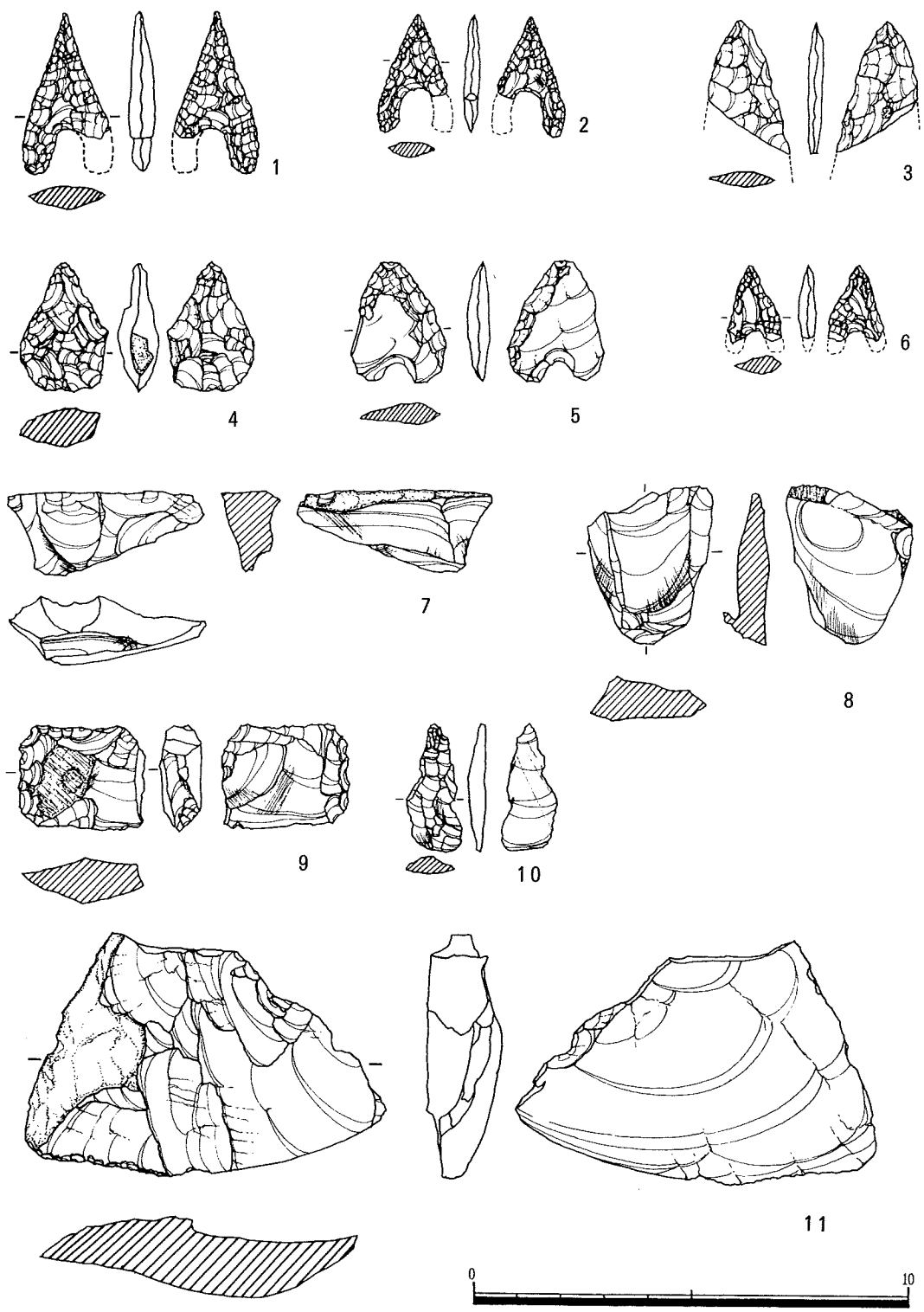


图16 才木地区出土石器(1) ($S = \frac{2}{3}$)

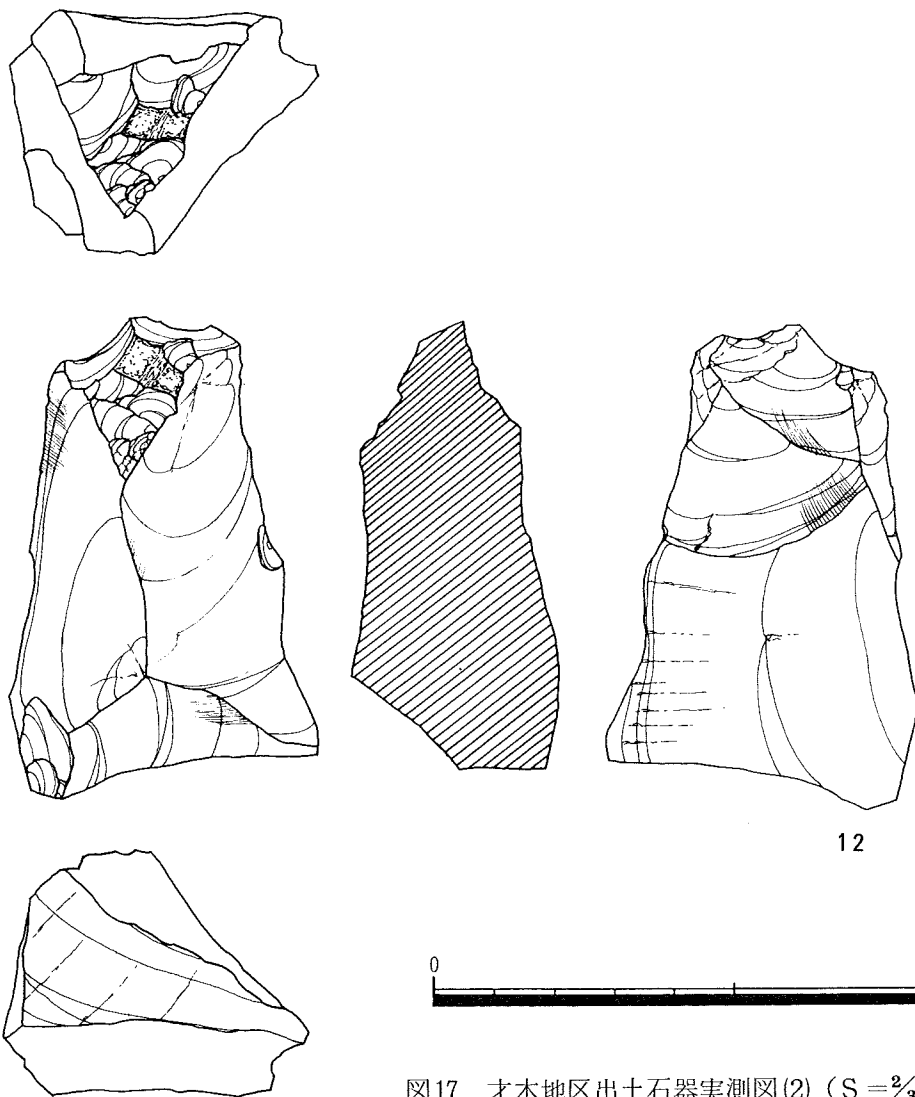


図17 才木地区出土石器実測図(2) (S = $\frac{2}{3}$)

No.	図版挿図 No.	器種	出土地点	計測値	形態	特徴	石材	分類
1	図版8 図16	石鉄	才木遺跡 含土一括	最大長 3.7 最大巾(2.1) 最大厚 0.5	先端部は鋭く尖り、側縁部はやや膨みをもつ。基部は大きくU字状に挟り込まれ、脚端は丸くなる。断面はレンズ状をなす。片脚欠損。	両面とも入念な押圧剥離がなされており、一次剥離痕はほとんど残さない。	黒礫石	
2	図版8 図16	同上	同上	最大長 2.7 最大巾(1.7) 最大厚 0.3	先端部は鋭く尖り、側縁部は直線的に開き基部でしぼむ。基部は大きくU字状に挟り込まれ、脚端は丸い。断面はレンズ状をなし、片脚は欠損する。	両面とも入念な押圧剥離がなされているが、片面中央部には一次剥離痕を残す。	黒礫石	

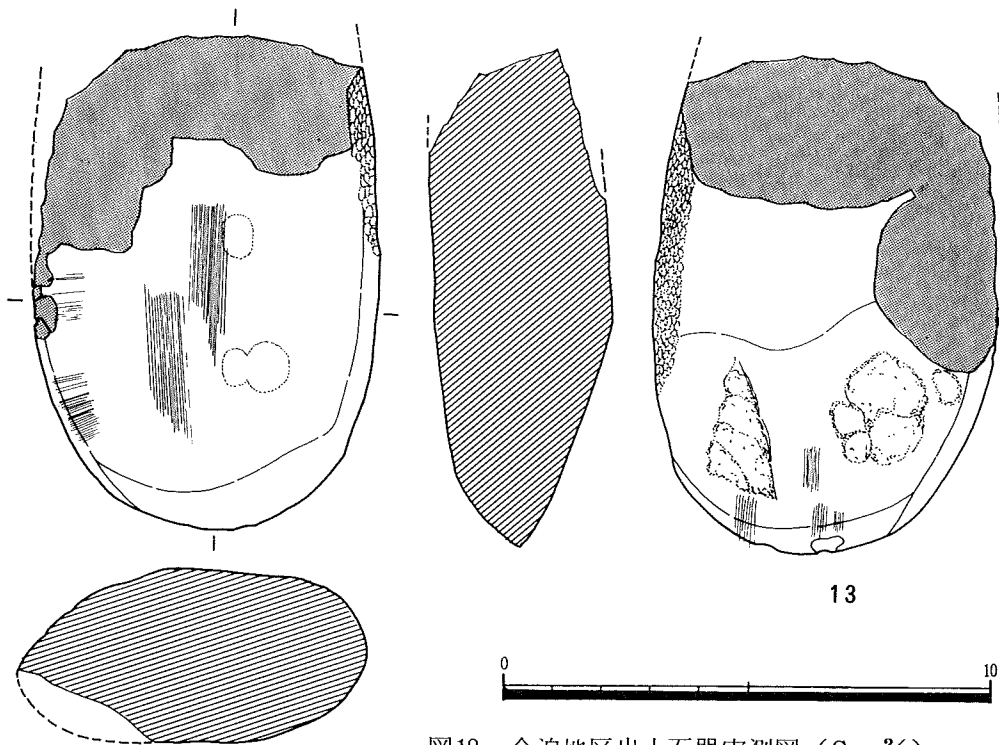


図18 金迫地区出土石器実測図 (S = 2/3)

No	図版挿 No	器種	出土地点	計測値	形態	特徴	石材	分類
3	図版8 図16	石鉄	才木遺跡 含土一括	現存長 3.0 現存巾 1.9 最大厚 0.3	基部は欠損。先端部は尖り、側縁部は膨みをもつ。	両面とも押圧剥離を行なうが、やや粗い。	安山岩	
4	図版8 図16	同上	同上	最大長 3.0 最大巾 2.0 最大厚 0.9	先端は尖り、全体に下脹れの形状を呈する。一側縁には自然面を残す。基部には抉りはなく、断面はレンズ状をなすが、かなり厚い。	両面とも押圧剥離を行なうが、全体に粗雑な感をうける。	チャート	
5	図版8 図16	同上	同上	最大長 2.8 最大巾 2.2 最大厚 0.5	先端は丸味をもち、側縁部はやや凹凸をなす。基部は浅く抉り込まれ、脚端は丸い。全体に左右対称ではなく、アンバランスとなる。断面はレンズ状。	両面とも一次剥離痕を大きく残す。基部抉りと一側縁部のみ両面からの押圧剥離を行なう。	安山岩	
6	図版8 図16	同上	同上	最大長 (2.0) 最大巾 1.3 最大厚 0.4	先端部は鋭く尖り、側縁部は直線的に開き基部に至る。両脚部端は欠損するが、基部の抉りは比較的深いと考えられる。やや小型である。	内、外面とも周縁部を中心に押圧剥離を行なうが、中央部には一次剥離痕を残す。	黒礫石	

No.	図版 挿図No	器種	出土地点	計測値	形態	特徴	石材	分類
7	図版8 図16	石鏃	才木遺跡 含土一括	最大巾 4.5 最大高 1.9 最大厚 1.5	平面三角形をなし、打面は平坦である断面は逆三角形を呈する。	打面は自然面を残し、背面には主に打面方向からの剥離作業が行なわれ、腹面は逆方向である。	黒耀石	
8	図版8 図16	同上	同上	最大長 3.7 最大巾 2.9 最大厚 1.0	平面は逆台形状をなし、打面は凹凸がある。断面は台形を呈する。	打面は一部自然面を残す。背面は打面方向からの剥離作業を行ない、蝶番剥離を行なう。腹面は全面にポジ面を残す。	黒耀石 (姫島産)	
9	図版8 図16		同上	最大長 2.5 最大巾 2.9 最大厚 1.0	平面は方形をなし、断面はやや厚く弾丸形を呈する。	背面は三側線方向から調整剥離を行ない、中央部に自然面を残す。腹面は二側線から調整剥離を行なっており、これによって平面方形に仕上げられる。	黒耀石 (姫島産)	
10	図版8 図16	剥片	同上	最大長 2.9 最大巾 1.2 最大厚 0.4	縦長剥片で、打面から端部にかけ中広となり剥片端は丸くなる。	背面は縦方向からの剥離痕を残し、腹面にはポジ面を全面に残す。	黒耀石	
11	図版8 図16	同上	同上		平面台形状をなす。断面は弓状を呈する。	背面は主として横方向からの剥離痕を残し、底辺に歯こぼれがみられる。腹面は全面にポジ面を残し、左ナメ方向からの加撃による。	ホルンフェルス	
12	図版8 図17	石核	同上	最大長 8.0 最大巾 5.2	平面台形状をなし、断面は多角形となる。	調整打面を有するが、剥片剥離は多方向からなされる。石核用素材の分割は横方向からなされている。	黒耀石 (姫島産)	
13	図版8 図18	石斧	金迫地区 含土一括	最大長 7.1 最大厚 3.5	頭部欠損。断面楕円形を呈し、刃部は丸くなる。	研磨は全体には及ばず刃部を集中的に行ない他は粗雑に行なわれる。		

写 真 图 版



調査区全景（東南より）



調査状況（南より）



調査風景（一本松）

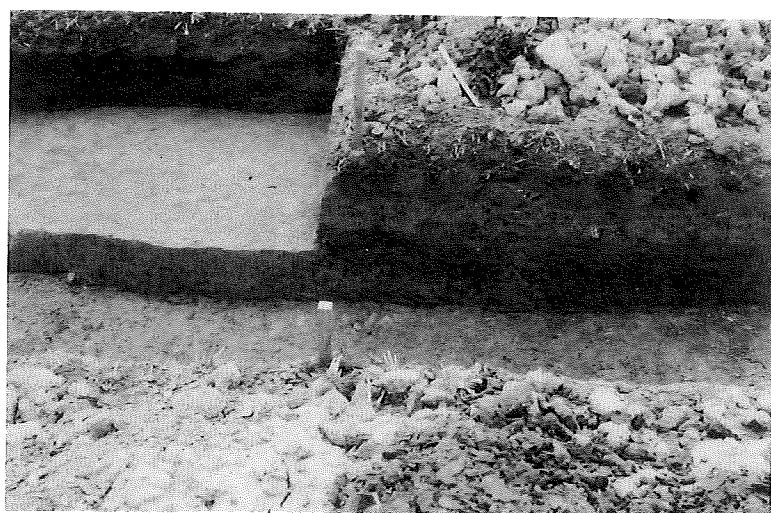
図版1 調査状況



角井原地区調査状況



小才木地区調査状況

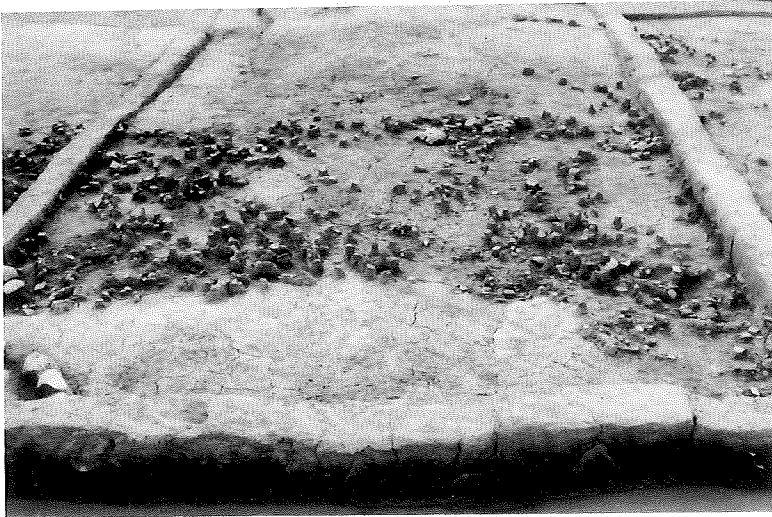


角井原地区土層面

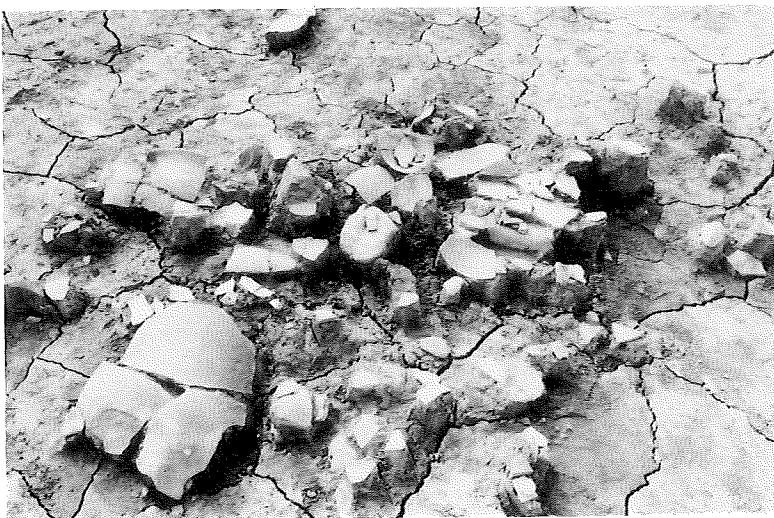
図版 2 調査状況



一本松調査状況

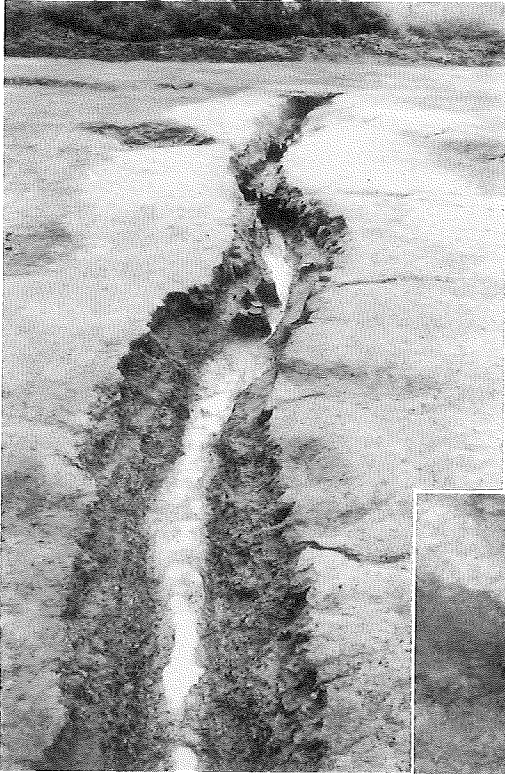


才木遺跡
土器出土状況(1)



才木遺跡
土器出土状況(2)

図版3 才木地区調査状況(1)



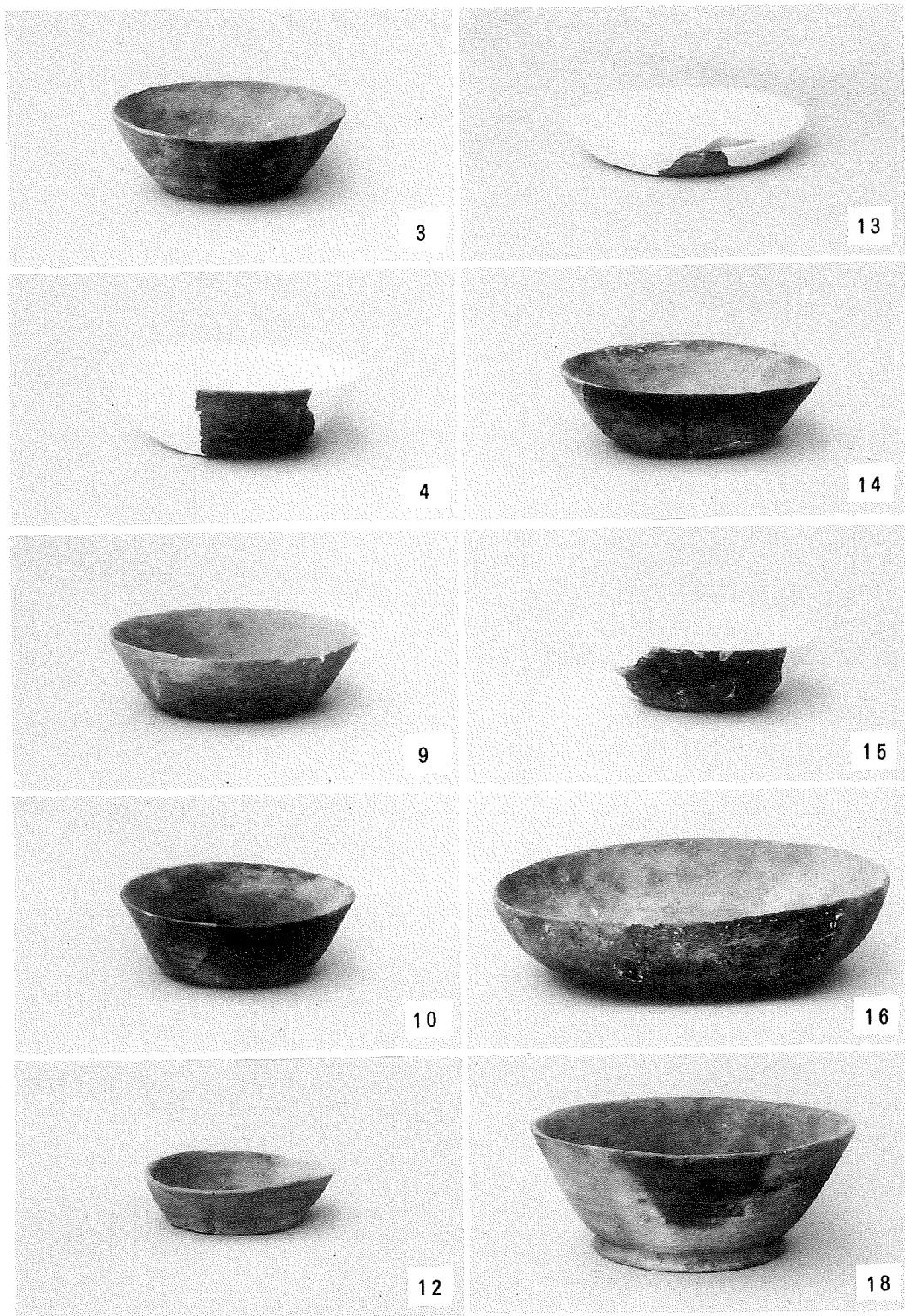
才木遺跡溝全景



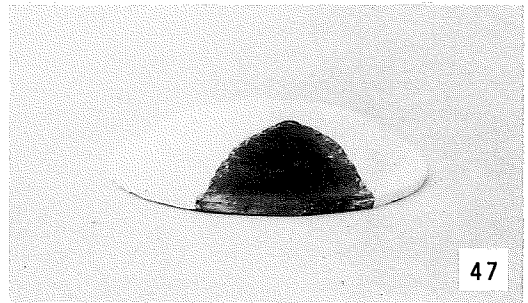
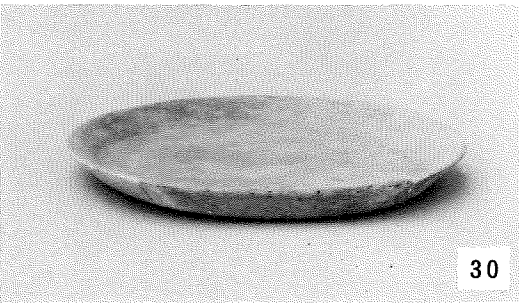
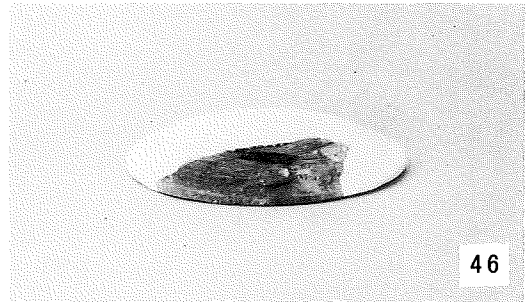
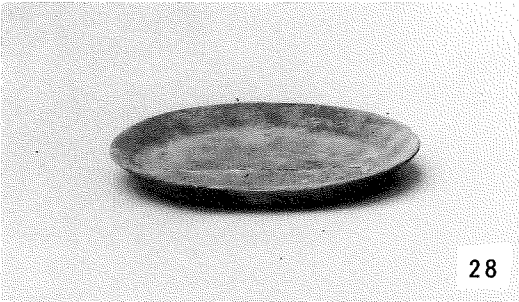
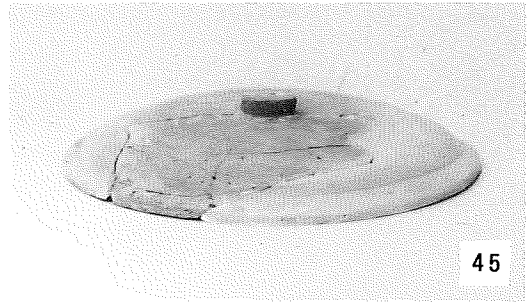
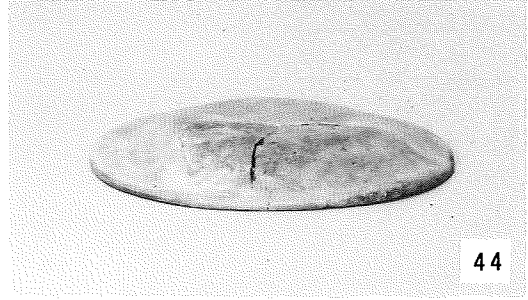
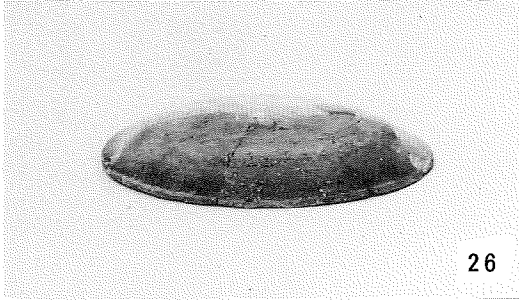
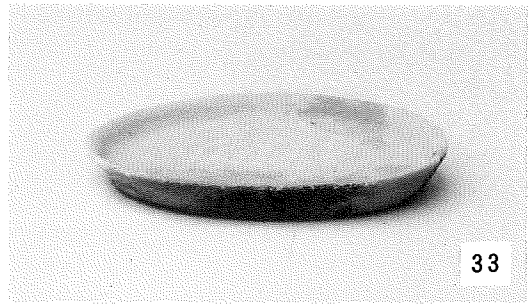
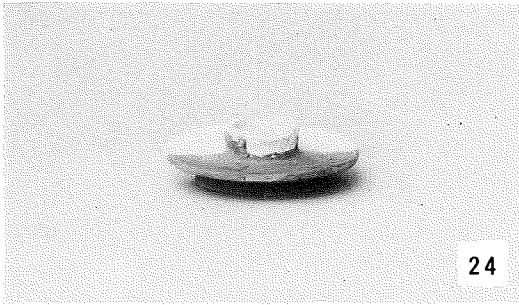
才木遺跡溝内
遺物出土狀況



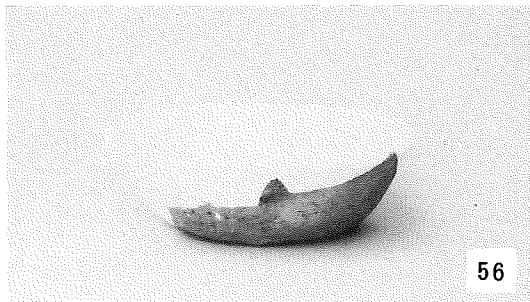
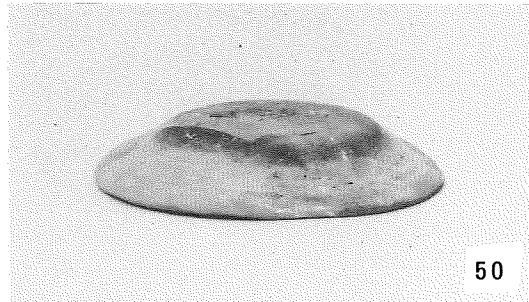
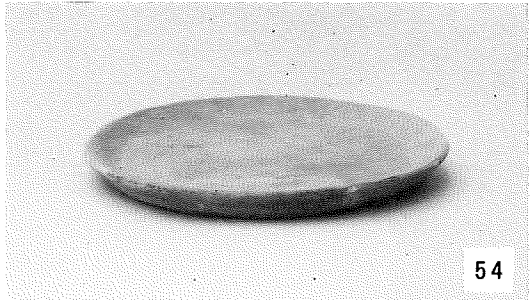
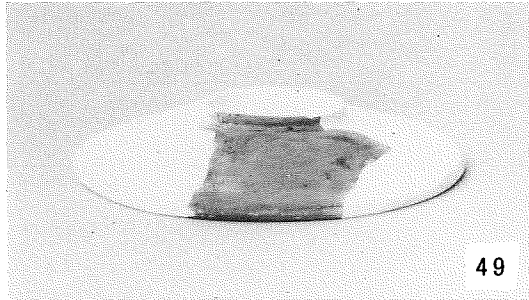
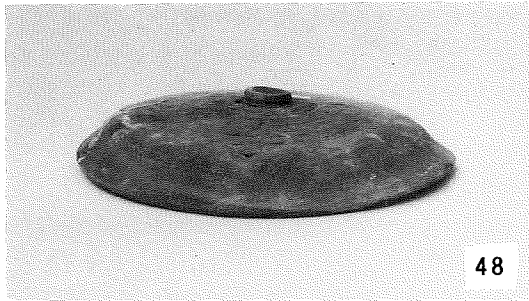
図版 4 才木地区調査状況(2)



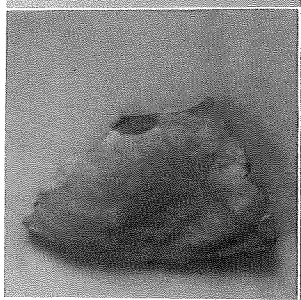
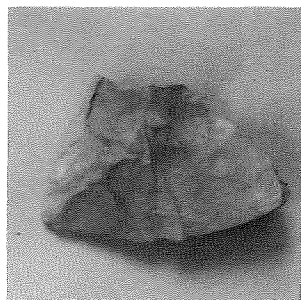
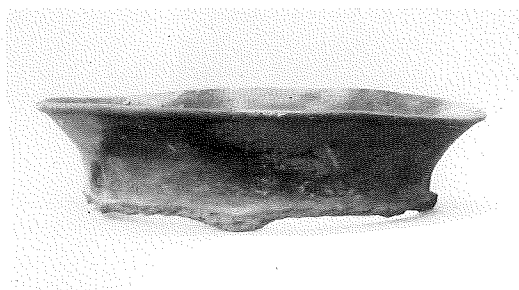
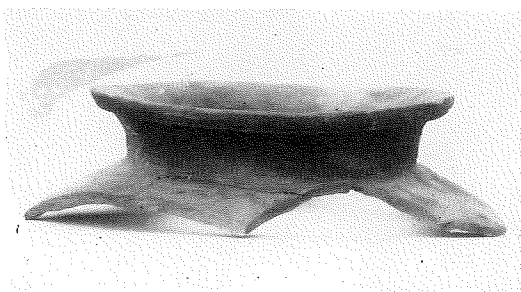
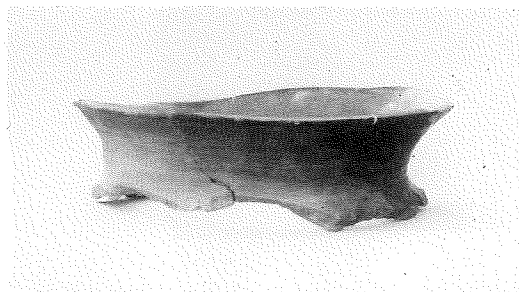
图版 5 土 器(1)



图版 6 土 器(2)



图版 7 土 器 (3)



图版 8 土 器(4) 石 器

洞ノ上遺跡群 I

中津市埋蔵文化財調査報告 第6集

昭和63年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 川原田印刷社





付図 昭和59年度調査地区Grid配置図 (S = 1:1000)

昭和59年度調査地区Grid配置図 (S = 1:1000)



